

多賀城市文化財調査報告書第96集

多賀城市内の遺跡 1

— 平成19年度発掘調査報告書ほか —

平成 21 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市は、古来より多くの人々が生活を営み、文化を育んだ地であり、その証として数多くの有形・無形の文化財が残されています。特に、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであり、関連する多くの文化財が所在しています。さらに、本市においては一般に「遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財が市の総面積の約1/4を占めており、毎年発掘調査において貴重な成果を得ています。そして、昭和54年度に本市単独の発掘調査を開始して以来、平成19年度までの29年間に実施した調査件数は337件、調査面積は約259,200m²にのぼります。当教育委員会では、その成果を単に記録の保存だけにとどめず、広くわかりやすく公開し、様々な面で活用がはかれるよう努めてきたところであります。

さて、本書は平成19年度埋蔵文化財緊急調査事業として実施した発掘調査8件と平成20年度農業用用排水路整備事業として実施した発掘調査1件の成果を収録したものです。いずれの調査も小規模なものでしたが、これらひとつひとつの成果の積み重ねが、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては新しいまちづくりに活用できるものと期待しています。

最後に、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成21年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、平成19年度埋蔵文化財緊急調査（単独）事業として実施した発掘調査8件と、平成20年度農業用用排水路整備事業として実施した発掘調査1件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 本書の執筆は、担当職員の協議のもとにI・IV・VII・Xを島田敬、II・III・VIII・IXを千葉孝弥、Vを武田健市、VIを石川俊英が担当し、編集は島田が行った。また、図版作成等は各担当者が行った。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1	VI	市川橋遺跡第68次調査	23
II	高崎古墳群第4次調査	3	VII	八幡沖遺跡第5次調査	28
III	高崎遺跡第65次調査	8	VIII	志引遺跡第2次調査	32
IV	高崎遺跡第67次調査	15	IX	桜木遺跡第1次調査	34
V	市川橋遺跡第63次調査	21	X	山王遺跡第67次調査	36

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 櫻井清勝（平成19年度）
文化財課長兼所長 佐藤慶輝（平成20年度）

調査一覧（1～8：平成19年度埋蔵文化財緊急調査事業 9：平成20年度農業用用排水路整備事業）

No.	調査名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	高崎古墳群第4次調査	高崎二丁目228-5	平成19年3月29日～4月6日	10m ²	千葉 孝弥
2	高崎遺跡第65次調査	留ヶ谷一丁目21	平成19年6月22日～7月5日	11m ²	千葉 孝弥
3	高崎遺跡第67次調査	高崎二丁目164-1	平成19年7月19日～8月3日	150m ²	島田 敬
4	市川橋遺跡第63次調査	城南一丁目1-12	平成19年6月27日～7月9日	37m ²	武田 健市
5	市川橋遺跡第68次調査	城南二丁目15-8、15-13	平成19年12月18日～平成20年1月11日	60m ²	石川 俊英
6	八幡沖遺跡第5次調査	明月一丁目29-1外	平成19年8月21日～8月29日	48m ²	島田 敬
7	志引遺跡第2次調査	東田中二丁目124-10、124-22	平成20年2月14日	19m ²	吉田 智治
8	桜木遺跡第1次調査	桜木二丁目9-33	平成20年2月19日	5m ²	吉田 智治
9	山王遺跡第67次調査	山王字山王四区・山王五区、市川字多賀前	平成20年12月5日～12月25日	220m ²	島田 敬 鈴木 琢郎

- 3 調査協力者 鈴木進二郎 鈴木和夫 久本孝行 株斎藤工務店 石岡春男 加藤真一 大場博
株渡邊舗装工業
- 4 調査従事者 浅野喜久男 阿部信夫 大江かおり 大竹利吉 大場勝喜 大場孝也 小野寺恵子
岡本典子 小野玉乃 狩野悌 官野清仁 小松まり 佐藤正 塩井一征 鈴木政義
武島好 中村敏雄 七海孝 橋沼茂二 平山節子 藤田恵子 柳裕順 渡辺ゆき子
- 5 整理従事者 村上和恵、横山佳織

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
S I : 穴居跡 S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」
(多賀城市教育委員会 2003) に従った。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期
存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われてい
ることから、907~934年の間とする考え(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年
報1997』1998)と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑
枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』
1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学
論文集』1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせている。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉・塩釜線沿いには標高5～6mの微高地が延びており、その北側には利府町にまたがる低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城跡や付属寺院の多賀城廃寺跡と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、東端部には柏木遺跡や大代横穴墓群などが点在している。

本書で取り上げるのは、以下の7遺跡である。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地及び沖積地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、大溝によって区画された中世の屋敷跡、近世の堀跡や井戸跡などが発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であるが、多賀城南面に施行された古代の方格地割が特筆される。これは、南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成し、まち並みが形成されたものである。ここからは、上級官人の邸宅などを構成する建物跡や井戸跡、河川やそれに架かる橋など多数の遺構が発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、高崎中学校建設に伴う調査で約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

高崎古墳群は、北西側に張り出す低丘陵の先端付近に立地し、その範囲は東西約120m、南北約140mである。現在確認できる古墳は1基のみである。これまで、古墳の周辺で3回の発掘調査が実施されているが、発見された遺構は掘立柱建物跡や竪穴住居跡などいずれも古代のものである。

志引遺跡は、標高20mほどの低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西、南北とも約100mである。古代の遺物が散布するほか、土壇状の高まりに三重塔を線刻した板碑が建てられている。

八幡沖遺跡は、標高2mほどの浜堤上に立地し、その範囲は東西約120m、南北約220mである。これまでの4回の発掘調査で、10世紀前葉以降の掘立柱建物跡などが発見されている。

桜木遺跡は、標高2mほどの沖積地に立地し、その範囲は東西、南北とも約70mである。昭和54年に実施した分布調査では、土壙状の高まりが確認されている。

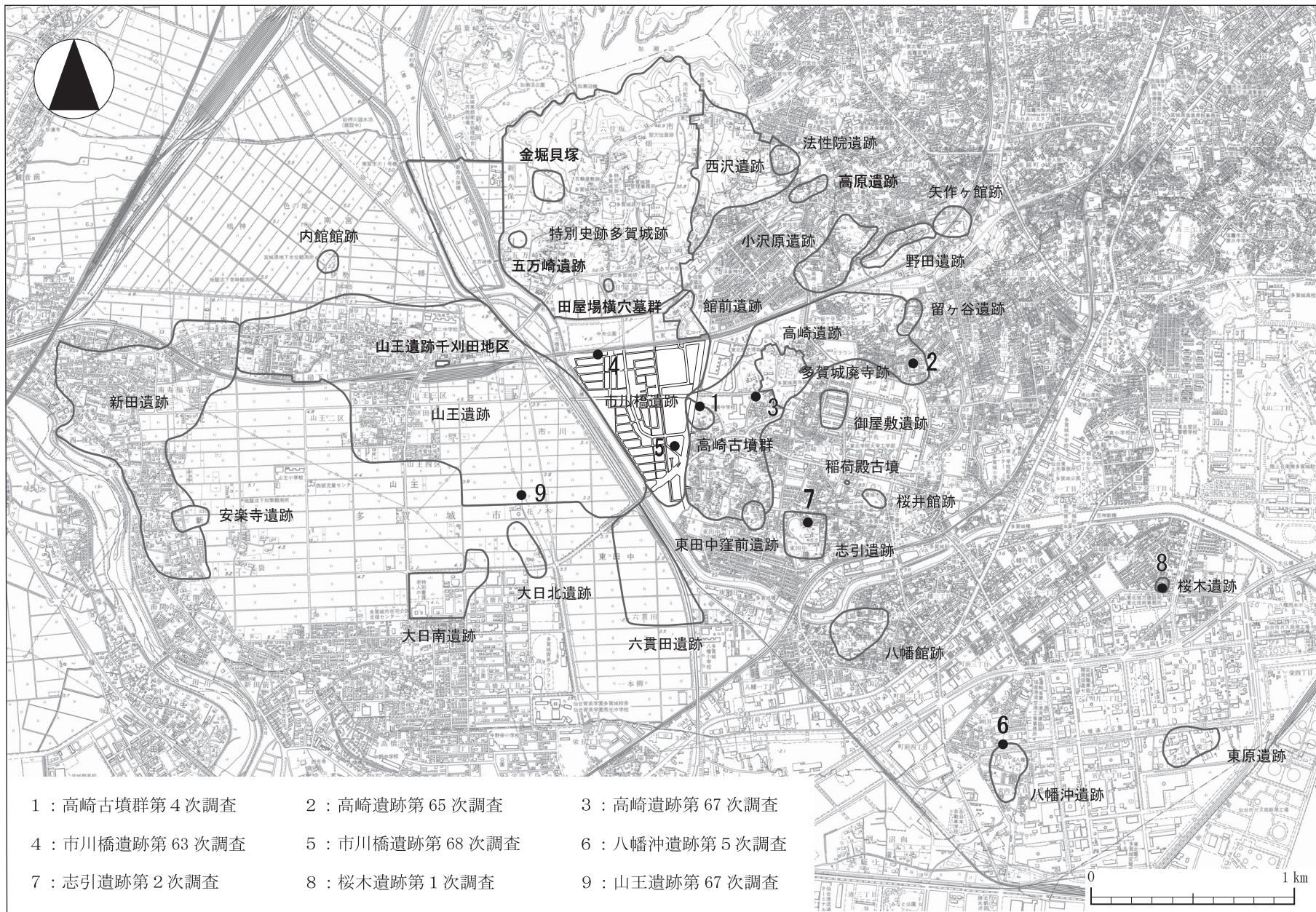


図1 調査地位置図

II 高崎古墳群第4次調査

1 遺跡の環境と周辺の調査成果

高崎古墳群は、特別史跡多賀城廃寺跡の南西にある低丘陵上にある。小字名をとって丸山団古墳と呼ばれることがある、3基の円墳からなるとされていたが、現在は最も規模が大きい1号墳しか確認することができない。1号墳は直径約40m、封土の高さは約7mとされているが、未調査のため詳細は不明である。かつて頂部で木炭の散乱が確認されたことから、木炭炉の可能性が指摘されており、年代は規模が大きいことから古墳時代中期頃と考えられている。

2 調査に至る経緯と経過

本件は擁壁工事に伴う確認調査である。平成19年3月7日、地権者より当該区における擁壁工事と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。その計画では、施工延長約43mにおいて現地盤より最大幅90cm、最深40cmの掘削を行い、擁壁設置後に最大1.2mの盛土を施すというものであり、南側に既に建設されている共同住宅の通路建設にも関わるものであった。擁壁設置予定地の南側約30mについては、城南土地区画整理事業の際に削平されているが、北側については旧地形を残している可能性が高いと考えられた。また、位置的には東西大路東道路の延長線上にあり、それに関わる遺構の存在が想定された。そのため、対象範囲は狭隘であったが確認調査を行う方向で協議を進めたところ、3月27日に承諾書の提出を受け、3月29日に調査に着手した。

地権者側から重機や作業員等の提供を受け、表土や攪乱層を除去したところ、南側では岩盤が現れたが、北側では溝状遺構とそれより古い整地層を発見した。今回の調査は、諸般の都合により断続的に行わざるを得なかつたが、4月2日に測量基準点を設置し、5日に調査区を清掃して写真撮影を行い、6日に平面図と断面図を作成して調査を終了した。

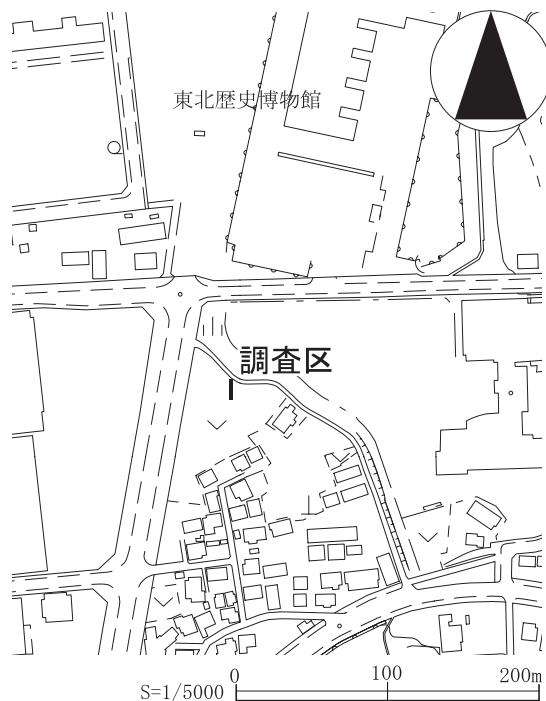
今回の調査によって得られた結果を地権者側に報告し、今後の工事計画について協議したところ、遺構の保存について理解を得ることができ、遺構が発見された範囲については擁壁工事を取りやめ、現状を変更しないこととなった。

3 調査成果

(1) 層序

今回の調査区は、南側から北側に向かって舌状に延びる細長い低丘陵にあたる。表土であるI層の下は、大部分が直接地山となっており、南側では凝灰岩質の岩盤が現れた部分もある。

I層：現代の畑の耕作土である。下層はガラス片などを含む攪乱層である。



第1図 調査区位置図

II層：調査区北端部で確認した褐灰色の粘質土である。粘性は弱く、締まりも弱い。厚さは2～8cmで、北側に向かって落ち込むように堆積している。深掘りしたわずかな箇所で確認したのみであるが、旧表土と考えられる。

III層：II層の下層にあるにぶい黄橙色の砂である。地山の可能性もあるが詳細は不明である。

(2) 発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、整地地形1層と溝状遺構1条である。

S X11整地地形跡

調査区北半部で発見した整地地形跡である。確認できた範囲は南北約4mであり、南側では地山上に、北端部の深い部分では旧表土と見られるII層の上に直接地形を施している。厚さは、南側の薄い部分で25cm、北側はSD12溝跡によって破壊されているが30cm以上である。にぶい黄褐色土、褐色土、明黄褐色土などが、南側から北側に向かって低くなる地形に合うように、やや傾斜して堆積しており、北側ほど厚くなっている。南側の層は砂を含んで堅く締まっており、SD12溝跡に覆われる部分では地山ブロックを多く含んでいる。

遺物は出土していない。

SD12溝跡

S X11の上で発見した溝状遺構である。上幅1.4m以上、下幅0.7m以上、深さ約0.8mである。東西に延び、東でやや南に偏するように見受けられるが詳細は不明である。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯、須恵器甕、平瓦の破片が数点出土している。土師器杯は口クロ調整したものが1点ある。糸切りによって口クロから切り離した後、再調整を行っていないものである。黒色処理された内面には、中央部から上方に向けて放射状のヘラミガキが観察される。須恵器甕は口縁部が2点、体部が1点あるが、年代を示すような特徴がない。平瓦は3点あり、いずれも凸面に繩叩き目、凹面に布目がある。

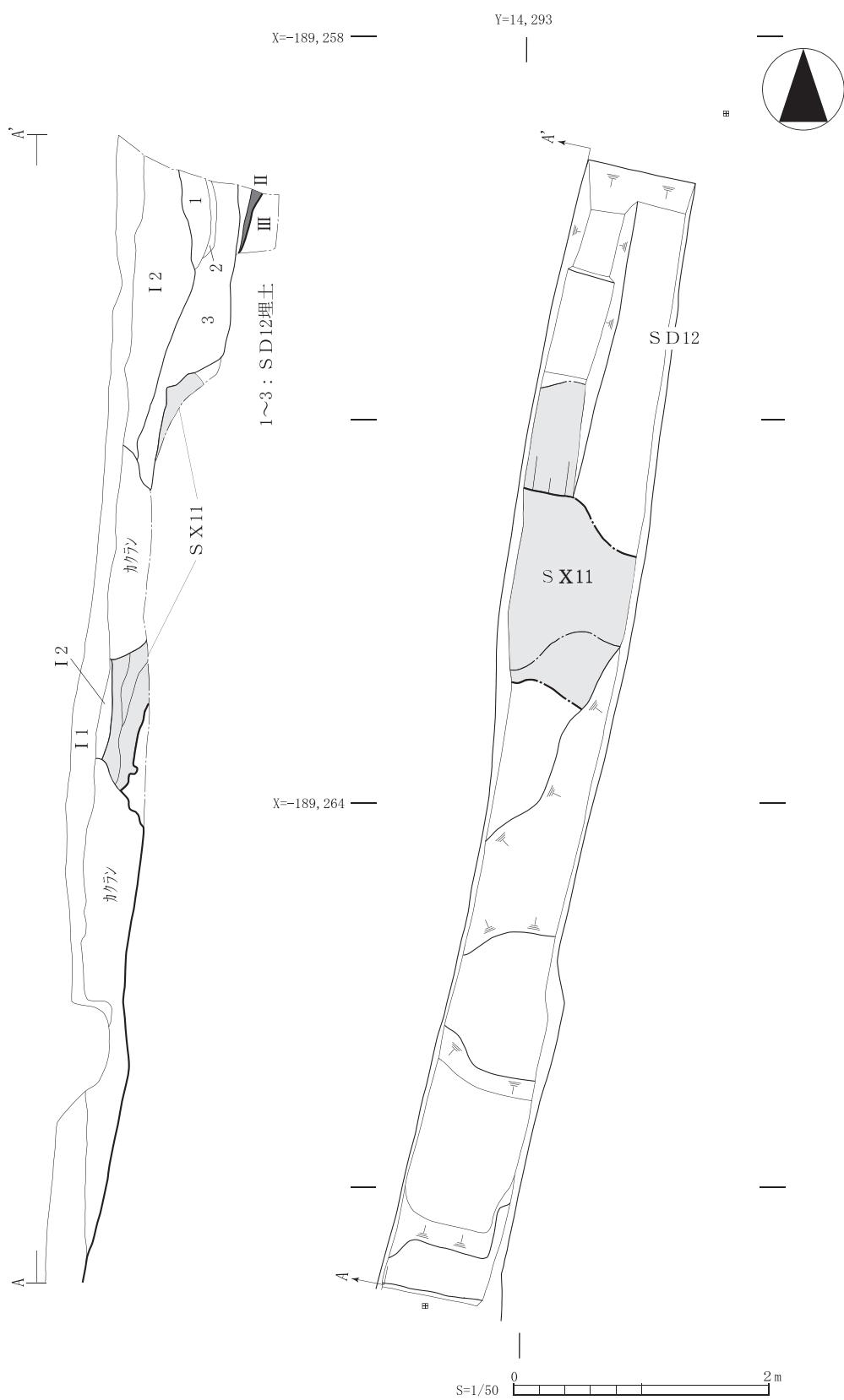
遺構外出土の遺物

I層から須恵器杯・甕・瓶、灰釉陶器壺の破片が出土している。須恵器杯は底部破片であり、回転糸切り後再調整を行わないものである。焼成前のヘラガキがある。灰釉陶器壺は底部破片であり、外面が回転ヘラケズリされ、内面には緑色の自然釉が付着している。

4 まとめ

(1) 遺構の年代

S X11整地地形跡からは遺物が出土していないため、それより新しいSD12の年代から推定する。SD12からは口クロ調整の土師器杯が出土しており、回転糸切り後再調整を行わないという特徴からおおよそ10世紀前葉から中葉に位置づけられる。したがってS X11はそれを下限とし、それ以前のものとすることができるが、具体的な年代は不明であり、10世紀前葉を下限とする古代の遺構と捉えざるをえない。



第2図 平面図・断面図

第3図 多賀城城外の方格地割と調査区の位置



(2) 遺構の性格

今回の調査区は、南側から延びてきた丘陵と沖積地のおおよそ境界に相当する。S X11はその丘陵裾部の緩斜面に対する整地地形であることから、平坦面確保を目的としたものと考えることができる。S X11が10世紀前葉を下限とする古代の遺構であると考えると、多賀城南面のまち並みを構成する街路の一つ「東西大路東道路」の延長線上に位置していることが注目される。東西大路東道路は、多賀城南辺築地に平行してその5町南側に建設された東西大路の東側延長線上に建設されたものであり、本調査区の西側約60mの地点まで検出している。山王遺跡第4次調査区における東西大路の路心（X=-189, 026. 072 Y=12, 619. 397）と、山王遺跡多賀前地区（宮城県文化財保護課調査地区）における路心（X=-189, 170. 000 Y=13, 597. 500）を結んだ直線は、多賀城南辺築地におおよそ平行して本調査区の北半部を通過することから、S X11は東西大路東道路建設に伴う整地地形、あるいは東西大路東道路の一部である可能性が高いと考えられる。



遺構検出状況（南より）



遺構検出状況（北東より）

III 高崎遺跡第65次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は市道留ヶ谷団地線道路改良計画に伴う発掘調査である。平成18年12月12日、多賀城市長より道路改良工事と埋蔵文化財とのかかわりについて協議書が提出された。計画では、全施行延長308.5mにU型側溝と集水枠を設置するもので、U型側溝設置の際には最大46cm、最深59.5cm、集水枠設置の際には最大1.0m、最深85cmの掘削を行うというものであった。この留ヶ谷団地線に囲まれる市営住宅跡地については、住宅建設時の造成によって地形が大きく改変されていたが、平成18年度に実施した確認調査において古代の竪穴住居跡や時期不明の小ピットを発見しており、今回改良工事を行う道路部分が比較的旧地形を残していると推定された。そのため、担当課である市建設部道路課とは対象地区が狭隘であることから当初は工事立会で対処するが、遺構が発見される可能性が高い東側約60mについては、遺構検出作業を行いながら工事を進めることで協議を進め、了解を得た。工事の進行に合わせ、西側溝の工事から立会を実施し、実際に発掘調査を行ったのは6月22・25・26日、7月5日の4日間である。

2 調査成果

(1) 地形と層序

今回の調査区は谷に面した丘陵北斜面である。南側から北側に向かって低くなっている、その比高は約8.8mである。調査区内では、表土（I層）の下に古代の遺物を含む褐色の砂質土（II層）があり、遺構を覆っている。厚さは5～35cm。その下は黄褐色土や黄橙色土の地山となっており、その上面が遺構検出面となっている。

(2) 発見した遺構と遺物

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、平場状遺構1を発見した。以下、それぞれの概要について説明する。

S I 1722竪穴住居跡

1区と4区で発見した竪穴住居跡である。1区南端部で検出した溝1は、南側の壁がほぼ直立気味に立ち上がることから南壁際の周溝と考えられ、それと方向的に直交する溝2と、4区で検出した溝3をそれ



第1図 調査区位置図

それ西辺と東辺に比定して推定したものである。平面形は方形を呈し、規模は溝2と溝3から一辺約6.5mである。方向は東で29~34度南に偏している。1区北半部では焼土層とそれを覆う炭化物層（第3図11層）、4区では焼土を多量に含む黒褐色粘質土（第4図4層）をそれぞれ地山上で検出していることから、地山を直接床面としたものと考えられる。SB1724と重複しており、それより新しい。

遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯、瓶・甕などが出土している。土師器杯は口縁部破片が1点ある。口クロ調整の有無は不明であるが、内外面ともヘラミガキを行い、黒色処理している。須恵器杯は底部を残す破片が4点あり、1点は回転ヘラケズリ、3点がヘラ切りである。須恵器瓶は体部破片であるが、外面や割れ口の色調が大戸窯製品とほぼ一致し、同窯の製品と考えられる。

SB1723建物跡

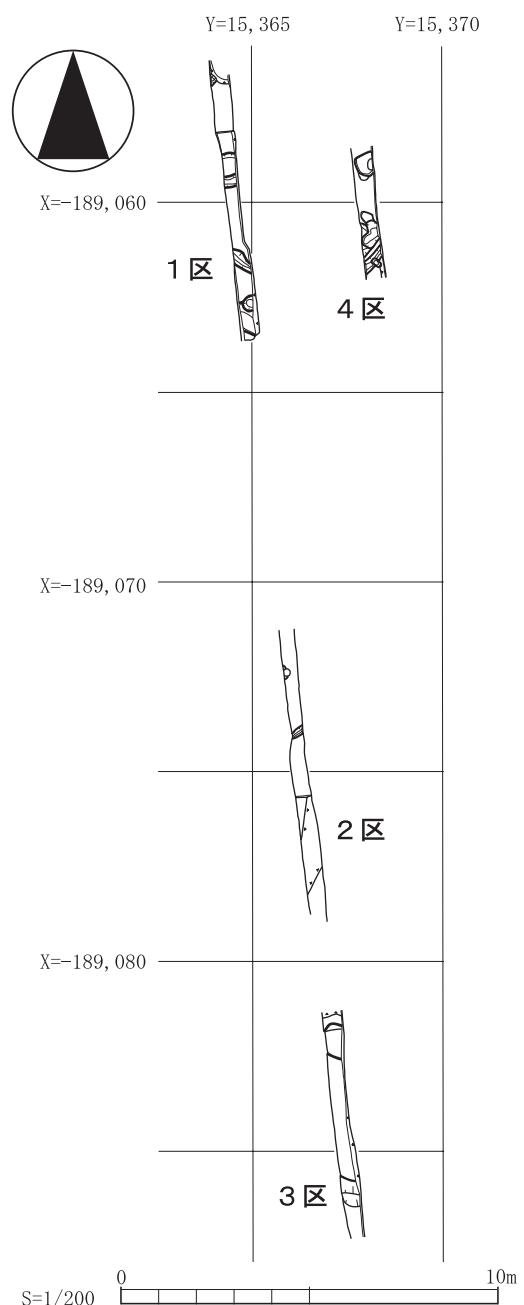
3区北端部で発見した1基の柱穴から想定した掘立柱建物跡である。柱穴は平面形が方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は一辺が約85cm、深さは40cm以上である。埋土は明黄褐色土であり、地山ブロックを多く含んでいる。方向については不明であるが、柱穴の方向は東で約30度南に偏している。

遺物は出土していない。

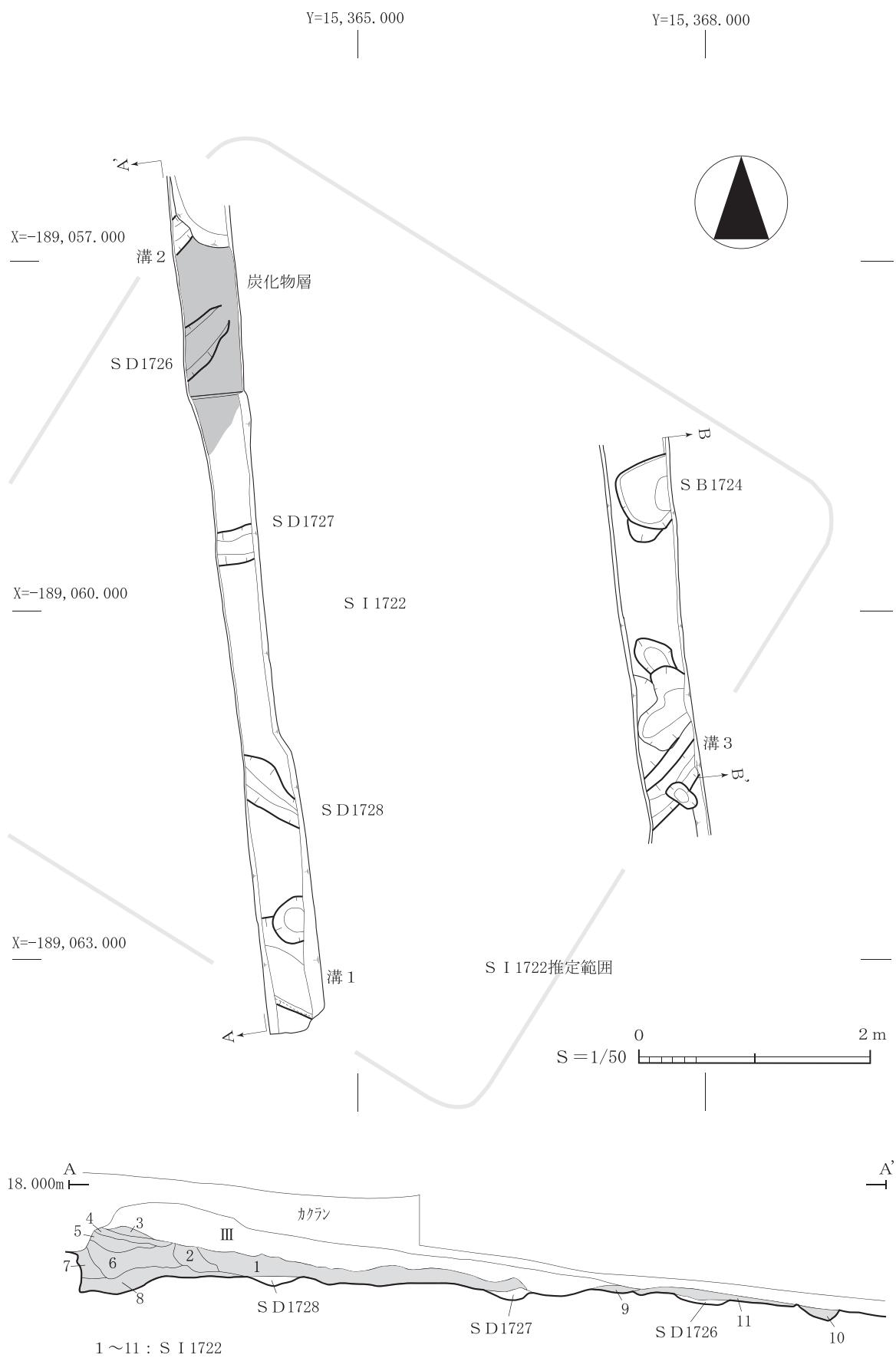
SB1724建物跡

4区北端部で発見した1基の柱穴から想定した掘立柱建物跡である。SI1722と重複しており、それより古い。柱穴は平面形がおよそ方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。規模は一辺が約60cm、深さは35cm以上である。埋土は地山の岩盤ブロックを多く含む明黄褐色土である。柱抜き取り穴があり、その埋土は岩盤ブロックを多く含むにぶい黄橙色土である。

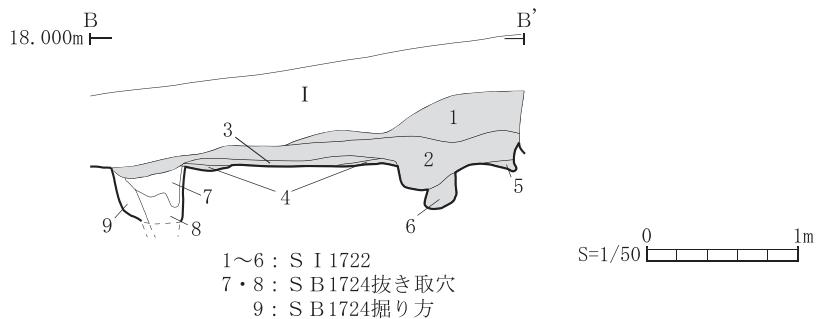
遺物は掘り方埋土から土師器杯の体部破片が1点出土している。非口クロ調整の有段丸底杯であり、外面にのみ段がある。調整は、段の上がヨコナデ、その下がヘラケズリであり、内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。



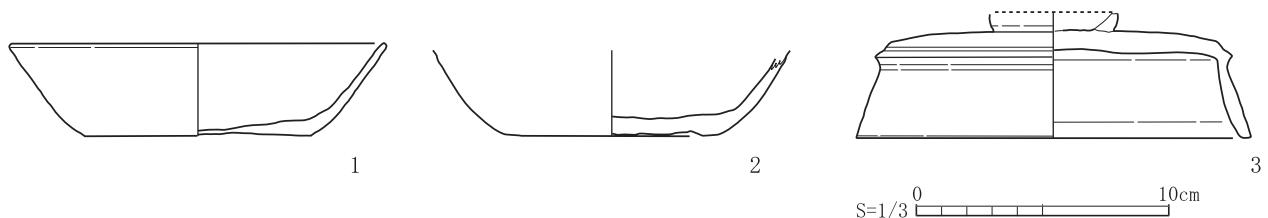
第2図 調査区配置図



第3図 S I 1722平面図・断面図（1）



第4図 S I 1722断面図（2）



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考	単位：cm
			外 面	内 面							
1	須恵器杯	SI1722 1層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.9) 4/24	(9.0) 9/24	3.7		R1		
2	須恵器杯	SI1722 床面直上	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ		8.4 19/24			R3		
3	須恵器蓋	2区 Ⅲ層	ロクロナデ 天井部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(15.6) 7/24				R5		

第5図 出土遺物

S X 1725平場状遺構

3区南端部で発見した平場状遺構である。地山を約30cmほど垂直に掘り下げ、平坦面を作り出している。竪穴住居跡の可能性もあるが、壁際に周溝が見られないことから平場状遺構として報告する。規模については明確に示しがたいが、埋土の分布範囲とみれば約2.5mとなる。方向は東で約25度南に偏している。埋土は、壁際にのみしまりのないにぶい黄褐色砂質土が見られるが、ほかは地山ブロックを多量に含む褐色土が南側から北側へ傾斜して堆積しており、人為的に埋められたような様相を呈している。遺物は出土していない。

S D 1726溝跡

1区で発見した小規模な溝跡である。S I 1722と重複しており、その焼土や炭化物層によって覆われている。検出した長さは約0.6m、規模は幅35cm、深さ10cmである。方向は東で約33度北に偏している。埋土は褐色砂質土である。遺物は出土していない。

S D 1727溝跡

1区で発見した小規模な溝跡である。S I 1722と重複しており、その埋土1層（第3図）によって覆わ

れている。検出した長さは約0.4m、規模は幅30cm、深さ11cmである。方向は東で約6度北に偏している。埋土は焼土を多く含む暗赤褐色土である。遺物は出土していない。

S D 1728溝跡

1区で発見した小規模な溝跡である。S I 1722と重複しており、その埋土1層（第3図）によって覆われている。検出した長さは約0.8m、規模は幅25～40cm、深さ8cmである。方向は西で35～46度北に偏している。埋土は黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

遺構外出土の遺物

2区のⅢ層から土師器杯、須恵器杯・瓶・蓋が出土している。土師器杯は口縁部の小破片が1点ある。非口クロ調整であり、外面の調整は口縁部がヨコナデ、体部は不明である。内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。須恵器杯は底部の破片資料であり、ロクロからの切り離しはヘラ切りで、再調整はない。須恵器蓋は天井部にリング状のつまみがついたもので、短頸壺の蓋と見られる。天井部は回転ヘラケズリされている。

その他、2区I層から須恵器甕の体部破片が2点出土している。

3 遺構の年代と性格

竪穴住居跡の年代：S I 1722からは、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・瓶・甕が出土している。いずれも破片資料であるが、須恵器杯の中でロクロからの切り離しがわかる資料が4点ある。その内訳は、回転ヘラケズリされたものが1点、ヘラ切りのものが3点であり、後者が多い。須恵器杯がヘラ切りを主体とし、回転ヘラケズリされたものを少数含むという方は、延暦9年（790）以前に位置づけられる市川橋遺跡S X1351AやS X1351Bと共に通しており、それらの中には、図上で復元できた第5図1と類似するものも含まれている（註1）。

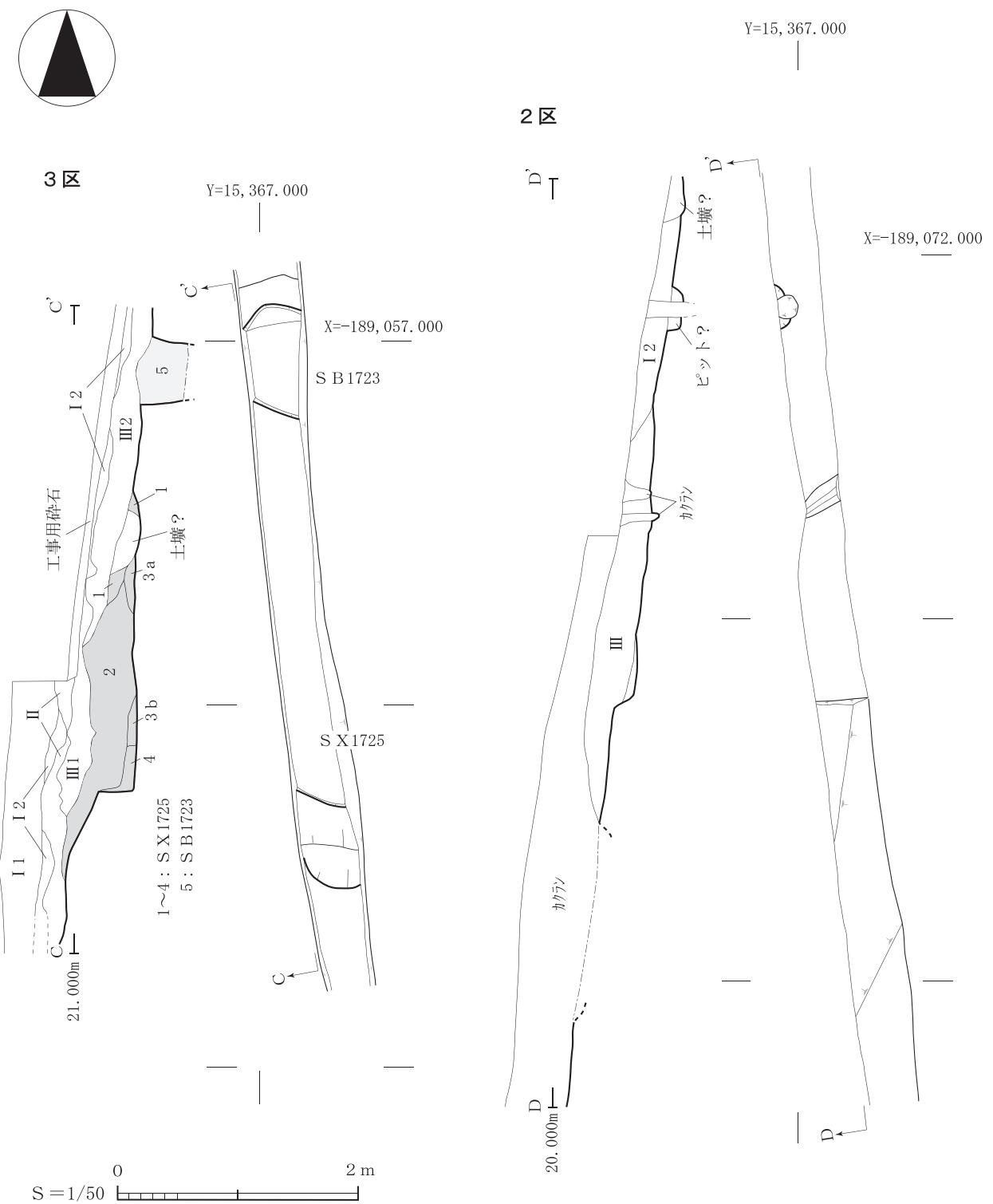
ところで、山王遺跡のSD180からは天平宝字7年（763）の具注歴と供伴した良好な資料がある（註2）。その中の須恵器杯はそのほとんどが回転ヘラケズリあるいは手持ちヘラケズリなどの再調整を行ったものであり、ヘラ切り後無調整のものはきわめてわずかしか確認されていない。これらのことから、S I 1722出土資料は763年を上限とする山王遺跡SD180Bよりは新しい要素を有し、790年を下限とする市川橋遺跡S X1351A・S X1351Bなどに共通点が多いと見ることができることから、8世紀後葉頃の年代を想定することができる。

掘立柱建物跡の年代：S B 1723からは遺物が出土していないため年代は不明であるが、S B 1724は掘り方から土師器杯の体部破片が1点出土している。外面にのみ段がある有段丸底杯であり、その形状は郡山遺跡Ⅱ期官衙や多賀城創建期の遺構に伴うものに類似しており、7世紀末から8世紀前葉頃の年代が与えられているものと類似している（註3）。S B 1724は8世紀後葉頃と推定したS I 1722より古く、7世紀末から8世紀前葉頃を上限とするものと考えられる。

溝跡の年代：SD 1726・1727・1728については遺物が出土していないが、8世紀後葉頃と考えられるS I 1722より古いことから、8世紀後葉以前の遺構と考えられる。

平場状遺構の年代：S X 1725は遺物が出土していないため、年代は不明である。

最後に、これらの遺構のあり方について一言触れておきたい。調査区は谷に面した北向きの傾斜面であり、掘立柱建物跡と竪穴住居跡などを発見したことから、古代においては居住空間であったことが明らか



第6図 2・3区平面図及び断面図

になった。年代的には S B 1724が 7世紀末から8世紀前葉以降、8世紀後葉以前であり、S I 1722が8世紀後葉頃と考えられる。時期的には異なるが、S I 1722とS B 1724、S D 1726・1727・1728が重複していることは、この場所が建物や住居が設られる場として繰り返し使用されたことを示している。それらの具体的な性格については不明とせざるを得ないが、S I 1722のように多賀城南面にまち並み建設が始まった時期の遺構は、丘陵部の使われ方を知る上で興味深い資料を提供するものと考えられ、今後資料の蓄積が期待されよう。

(註 1) 多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ—』
2003

(註 2) S D 180溝跡については平成2・3年度に調査している。土器については第10次調査の概報〔多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡－第10次発掘調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）－』1991〕に掲載したものの内、「S D 180B溝跡」としたものである。漆紙文書については第12次調査の概報〔多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡－第12次発掘調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）－』1992〕において報告している。

(註 3) 多賀城市教育委員会『山王遺跡－第17次調査－出土の漆紙文書』1995

IV 高崎遺跡第67次調査

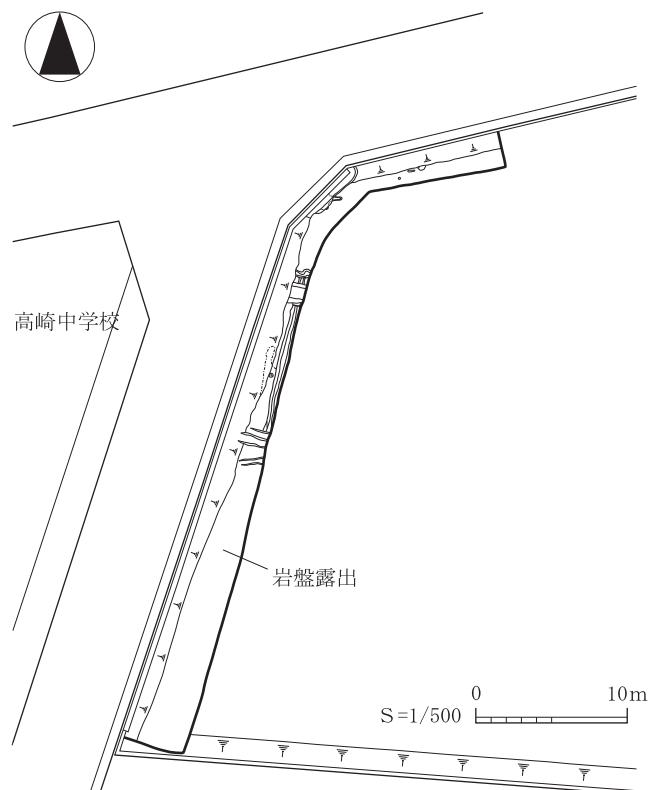
1 調査に至る経緯と経過

本調査は、農地整備（擁壁設置・盛土）に伴う発掘調査である。平成19年5月に高崎遺跡内における擁壁設置工事を中心とする農地整備計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、地権者から提出された。計画は、現在畑として利用している対象地において、その西辺に設けている既存の土留め擁壁を撤去し、新たに北辺から西辺にかけて総延長52m、最大幅3mの範囲で、最深3mの掘削を伴う擁壁設置工事を実施し、その後全体的に0.1~0.8mの盛土を行うというものである。当該地は、高崎遺跡のほぼ中央に位置し、平成5年には道路を挟んだ西側隣接地において高崎中学校建設に伴い発掘調査を実施した際、約80軒の竪穴住居跡をはじめ多数の遺構を見発見している。したがって、当該地にも遺構が延びてくることが予想されたため、影響があるとみられる擁壁設置工事の対象地において発掘調査を実施することになったものである。

調査は、平成19年7月2日に地権者からの調査承諾書及び依頼書の提出を受けて、7月19日から開始した。はじめに対象地の北端から既存擁壁の撤去を行ったところ、擁壁が斜面を大きく掘削して設置されたことにより、その下面に遺構が存在する可能性がないことが判明した。そのため、その撤去は調査終了後に行うこととした。次の作業として、従来のものより基底幅の大きい擁壁の設置に伴い掘削範囲の表土を、重機によって除去した。その結果、北半部では地表面から10

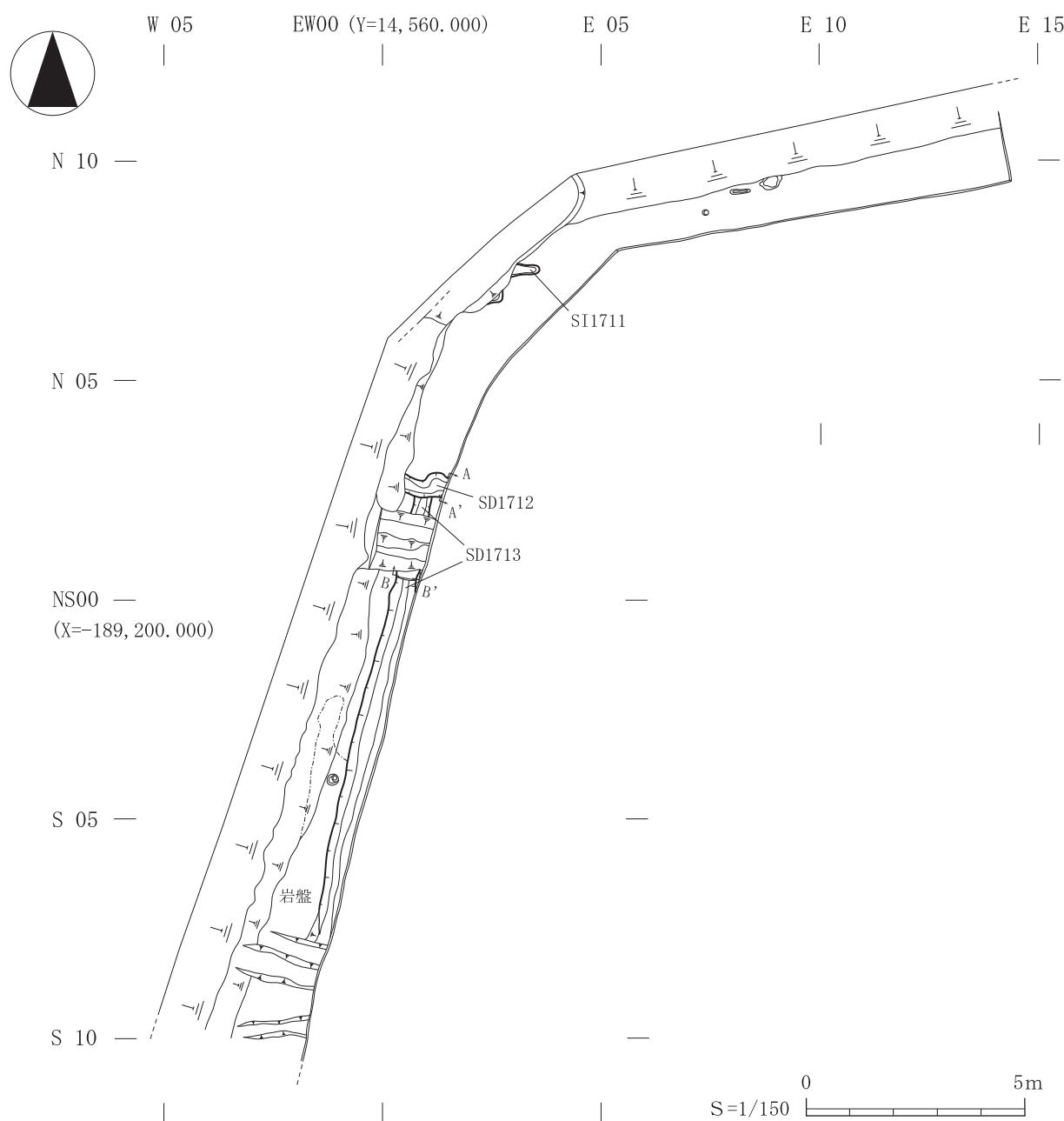


第1図 調査区位置図



第2図 調査区全体図

～20cm下で地山面を検出した。一方、南半部では旧地形が大きく削平されており、表土の下はすぐに岩盤になることを確認した。したがって、遺構検出作業は北半部に限定して実施し、コーナー付近で竪穴住居跡、西辺部で溝跡、柱穴等を発見した（7月25日）。このうち、竪穴住居跡は後世の掘削により大きく壊されており、ほぼカマド煙道部のみの残存であった。西辺部で検出した溝跡は、東西方向のものと南北方向のものの2条があり、直接の切り合い関係より前者が新しいことがわかった（7月31日）。調査においては、北半部に実測基準点を設定し、これをもとに1/20の縮尺で平面図作成を行った。一方、遺構が検出されなかった南半部については、平板測量によって1/100の縮尺で平面図作成を行った。なお、本調査の実測基準点については、X=−189,200.000、Y=14,560.000の交点を東西・南北の原点とし、1m離れ



第3図 遺構平面図（調査区北半部）

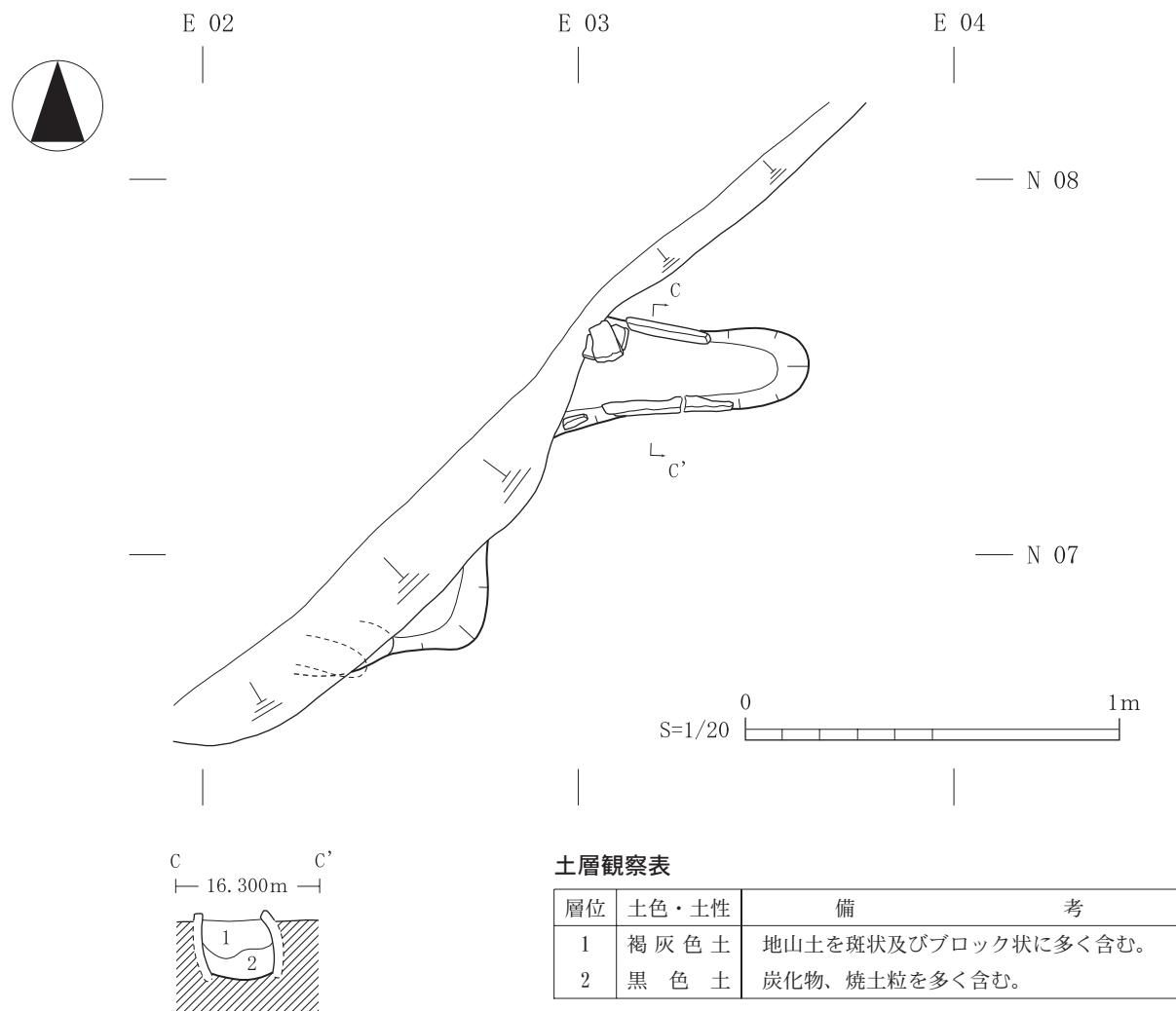
るごとに東西方向は東にE 01、E 02…、西にW 01、W 02…、南北方向は北にN 01、N 02…、南にS 01、S 02…と表示した。調査は、検出遺構の埋土掘り下げ、写真撮影、断面図・平面図作成等の一連の作業を順次行い、8月3日で終了した。

2 調査成果

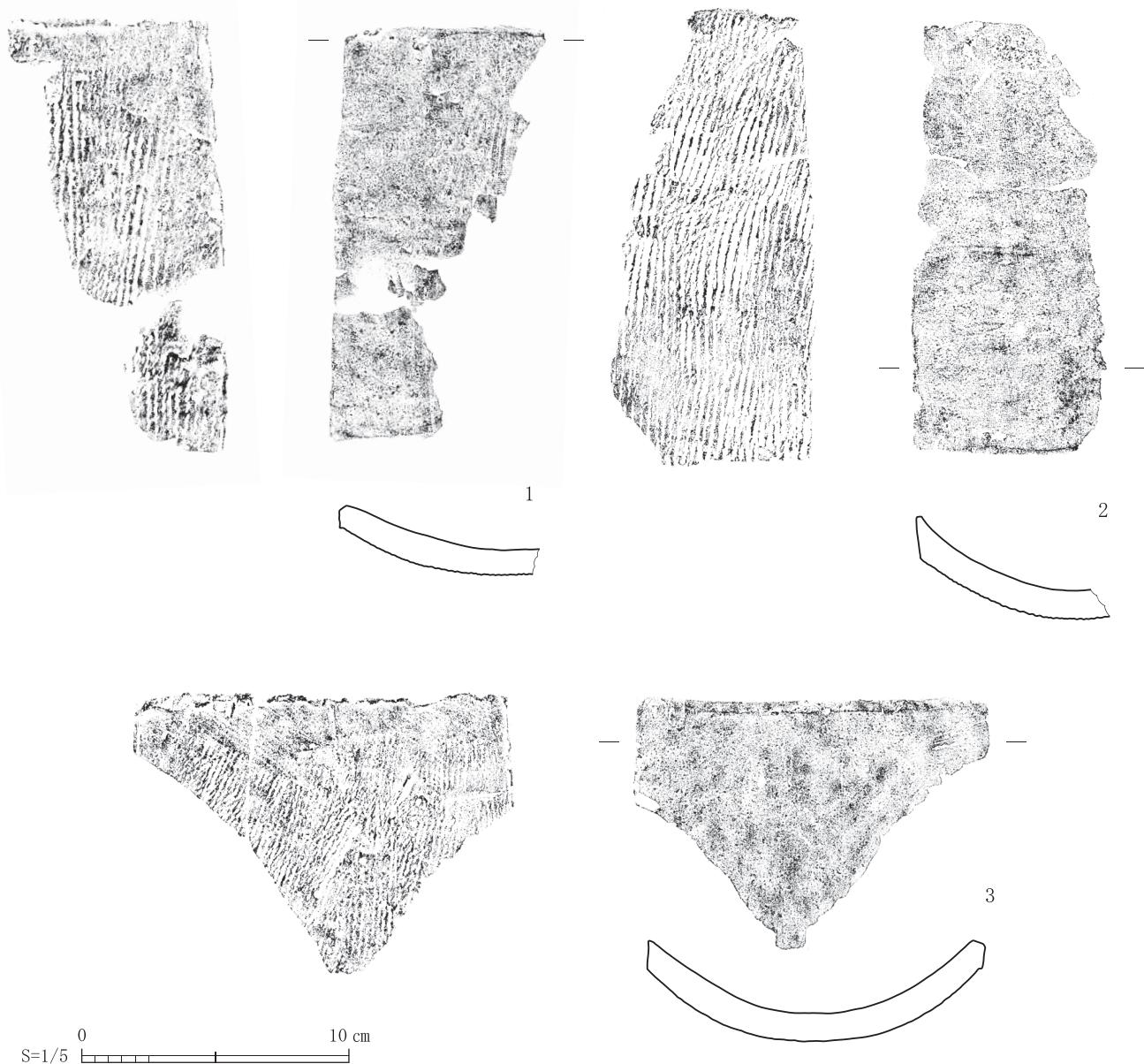
(1) 発見遺構と遺物

S I 1711竪穴住居跡

調査区北西部のコーナー付近の地山上で検出した。大部分が後世の掘削により壊されており、南東隅のわずかな範囲とカマド煙道部が残存するだけである。方向は、カマド煙道部の中心線でみると、発掘基準線にほぼ一致する。南東隅では、南壁に沿って延びる周溝を検出した。カマド煙道部については、確認できる長さは約65cmで、幅は20~27cmを測る。両壁に沿って平瓦が並べられている。これらは、壁の補強に用いられたものと推定される。ここから出土した平瓦は8点で、このうち4点は同一個体である。これらは、製作技法が桶巻き作りのものと一枚作りのものが混在する。さらに、後者には凹面をナデ調整したもの（第5図1・3）と、両面とも調整が全くみられないもの（第5図2）とがある。



第4図 S I 1711住居跡実測図



番号	種類	凸面	凹面	法量	写真版	登番	録号	備考
1	平瓦	縄叩き	布目ナデ	長さ: 33cm	1-1	R 1		多賀城跡政府分類 II B類
2	平瓦	縄叩き	布目	長さ: 35cm	1-2	R 2		多賀城跡政府分類 II C類
3	平瓦	縄叩き	布目ナデ	狭端幅: 25cm	1-3	R 3		多賀城跡政府分類 II B類

第5図 S I 1711住居跡出土遺物（平瓦）

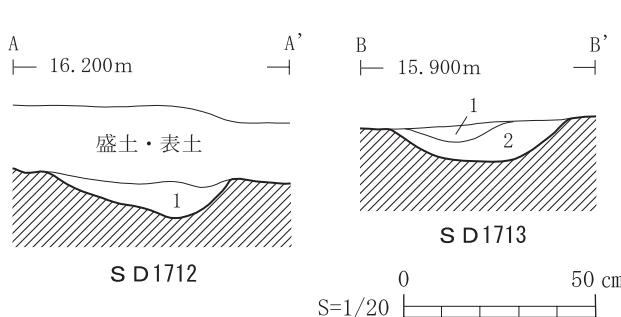
S D 1712溝跡

調査区北西部の地山上で検出した東西方向の溝跡である。S D 1713溝跡と重複し、それより新しい。東西とも調査区外にかかるため、確認できる長さは約1.0mである。わずかに屈曲するため、方向は東半部では東で約3度北に、西半部では東で約14度南に偏している。規模は、上幅38~56cm、下幅12~20cmで、

深さは約10cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で、地山土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は、須恵器杯の破片が1点出土している。

S D 1713溝跡

調査区西辺の北半部の地山上で検出した南北方向の溝跡である。北側でS D 1712溝跡と重複するが、この箇所での底面の状況から西側に屈曲すると推定される。南側は削平により延長部が失われており、確認できる長さは約10.5mである。方向は北で約14度東に偏している。規模は、上幅46~55cm、下幅14~32cmで、深さは約10cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、にぶい黄褐色土と褐灰色土の2層に分けられ、いずれも地山土を斑状に含んでいる。遺物は、須恵器瓶・甕、丸・平瓦の破片が出土している。



土層観察表

層位	土色・土性	備考
S D 1712埋土		
1	暗褐色土	地山土を斑状及びブロック状に含む。
S D 1713埋土		
1	にぶい黄褐色土	地山土を斑状に含む。
2	褐灰色土	地山土を斑状に含む。

第6図 S D 1712・1713溝跡断面図

3まとめ

- (1) 今回の調査では、調査区北半部において堅穴住居跡1軒、溝跡2条等を発見した。
- (2) 遺構の年代については、S I 1711住居跡で壁の補強材として再利用された平瓦の中に、凹面、凸面とも調整が全くみられない多賀城政庁IV期に該当するもの（註1）が出土していることから、貞觀11年（869年）が上限年代になると考えられる。また、S D 1712・1713溝跡は、出土遺物が僅少ですべて破片であるため、古代以降のものとするだけにとどまる。

（註1）宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』 1982



S I 1711住居跡（西より）



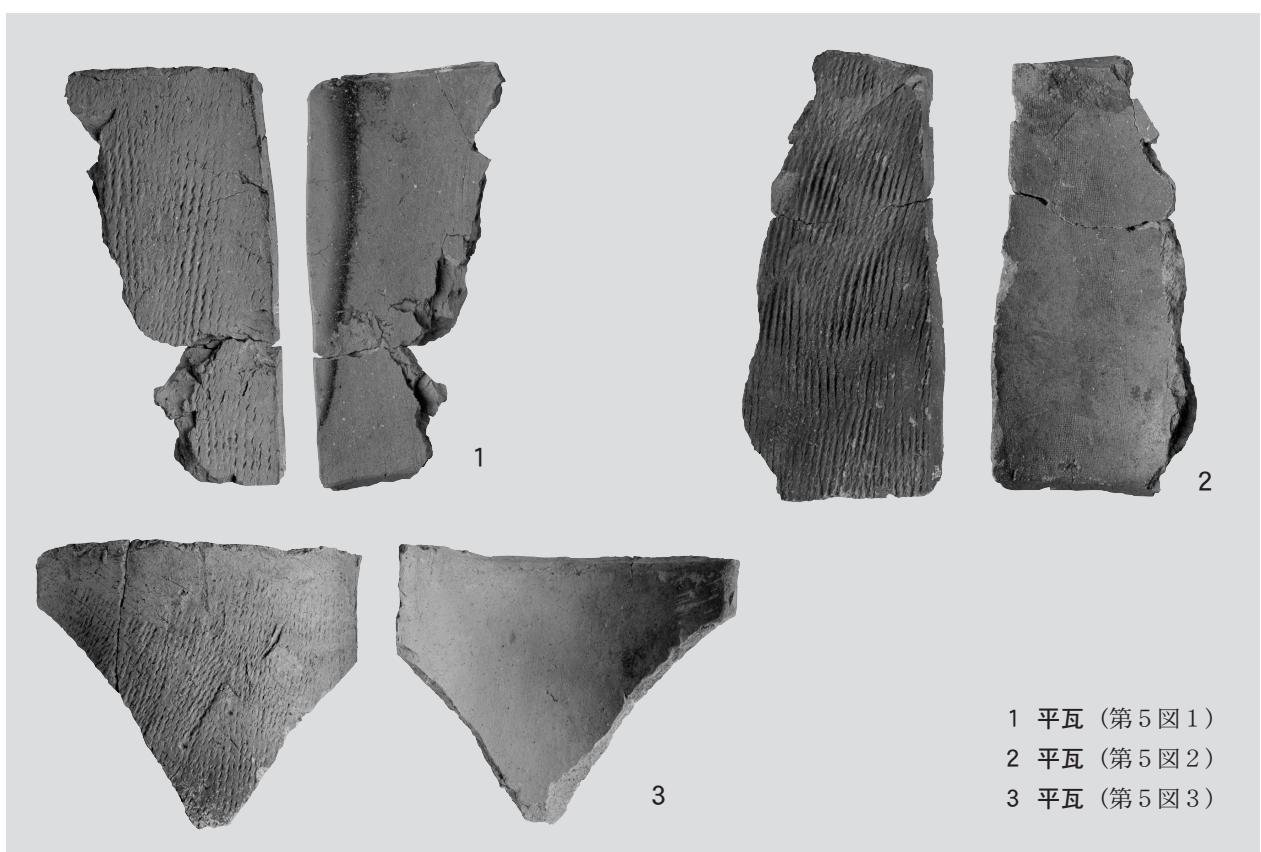
S I 1711住居跡煙道部（西より）



S D 1712・1713溝跡（北より）



調査区北半部（南より）



1 平瓦（第5図1）

2 平瓦（第5図2）

3 平瓦（第5図3）

写真図版 1

V 市川橋遺跡第63次調査

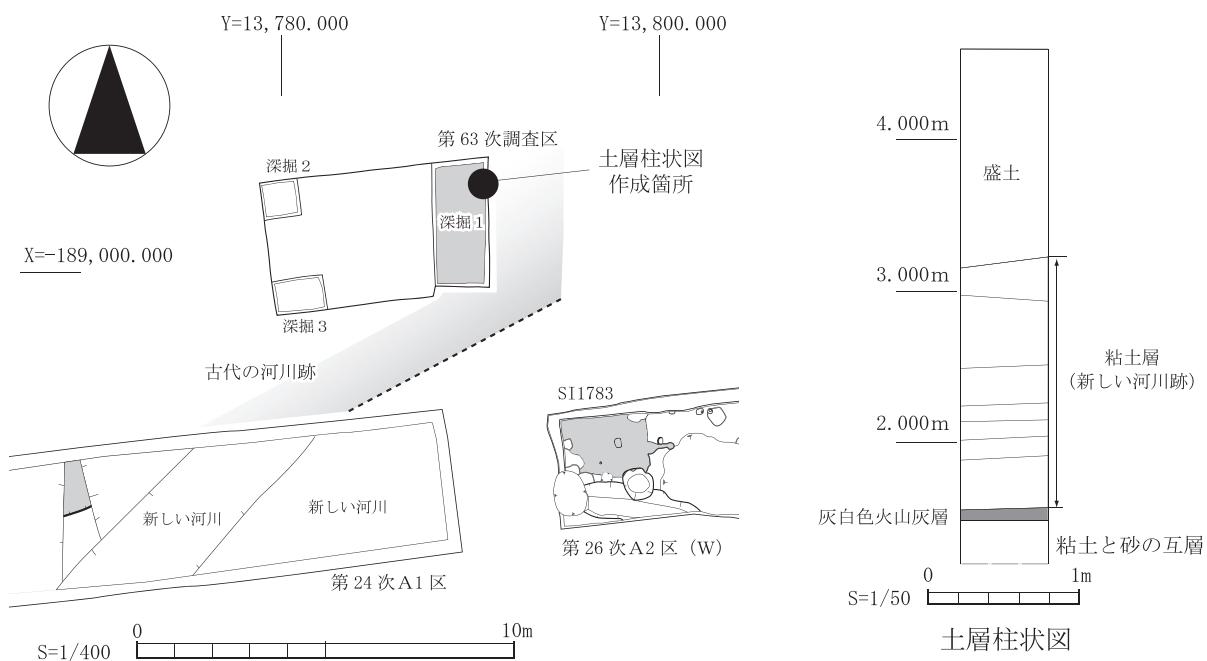
1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、城南一丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成19年5月、地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に、直径20cm、長さ10mのP C杭37本を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。協議の結果、工法変更による遺跡の保存が不可能であることから、6月18日に地権者より発掘調査の依頼を受け、本調査を実施した。

6月27日、重機により対象区の東側（深掘1）から表土除去に取りかかった。現表土下には、黒褐色または黒色の粘土層が1.6~1.7m堆積しており、その下層には10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰の自然堆積層を挟み、砂と粘土が互層に堆積していることを確認した。第25次A1区の調査成果より、粘土層はごく新しい時期の河川埋土であり、火山灰層以下が10世紀前葉以前の古代の河川跡であることが明らかとなっている。このため、古代の河川跡の痕



第1図 調査区位置図



第2図 第63次及び周辺の調査区

跡を探る目的で、調査区南西及び北西部でも深掘りを実施したが、確認することはできなかった。28日、調査区近接地に任意の基準点を設置し、調査区の平面・断面図を作成する。7月9日、任意の基準点に日本測地系の座標を移動し、現地調査の一切を終了した。



深掘 1

下方に白く帯状に見えるのが灰白色火山灰層



深掘 2

粘土層が厚く堆積している。

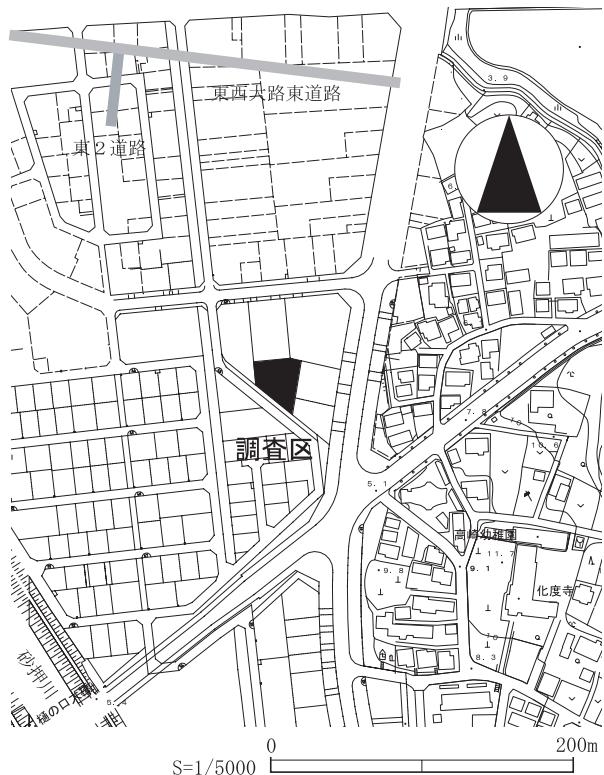
VI 市川橋遺跡第68次調査

1 調査に至る経緯と経過

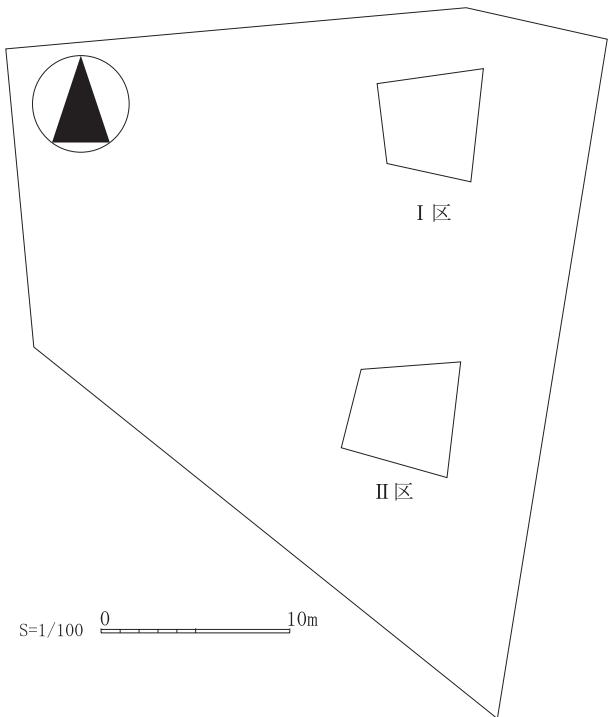
本調査は、城南二丁目15番8・13における個人住宅建設に係る発掘調査である。平成19年7月17日建設業者より当該地区における2区画分の住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。計画では、基礎工事の際に径60cm、長さ4.75mの湿式柱状改良杭を30箇所、径60cm、長さ5.75mのものを29箇所施すものであったことから埋蔵文化財への影響も懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、計画どおりの工法以外で建物を支える強度を得られないとのことから、発掘調査を前提とした協議を進めた。当該区周辺は広範囲に湿地が展開していることが予想されたことから、遺構の分布状況を把握する必要があると判断し、12月13日に業者より調査に係る承諾書の提出を受け、確認調査の実施に至ったものである。

調査は12月18日より開始し、便宜上調査区北側をI区、南側をII区とした。はじめに重機でI1～I3層（盛土及び現代の水田耕作土）を除去した。掘削土は、場外に搬出できないためII区側に積み上げた。翌日、土層観察と排水溝を兼ねた側溝を掘る。その後遺構検出作業を行い、大小二つの土壙を発見した。重複関係を確認後、遺構の埋土を掘り上げた。これらの作業と並行して平面図作成のための基準点の設定を行う。20日調査区の全景写真撮影後、遺構の平面・断面図等を作成する。21日土層注記の後、埋め戻し作業を行い、I区の現地調査を終了した。

II区の調査は1月8日より開始した。重機でI1～I3層（盛土及び現代の水田耕作土）を除去した。掘削土は、I区側に積み上げた。翌日、遺構検出作業を行い、溝跡1条発見し、その埋土を掘り上げた。本作業と並行して平面図作成のための基準点の設定を行う。10日調査区の全景写真撮



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

影後、遺構の平面・断面図等を作成する。11日土層注記の後、埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第3図)

今回の二つの調査区で確認した層序は、以下のとおりである。

I 1層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは約2.2mである。

I 2層：現代の水田耕作土で、厚さは5～19cmである。

I 3層：現代の水田耕作土で、厚さは4～12cmである。

II 層：I区南東部で確認した砂や酸化鉄を含む褐灰色粘土で、厚さは6～15cmである。

III 層：砂や酸化鉄を含んだ黒色粘土。厚さは4～20cmである。SK3369・SK3370を覆っている。

IV 層：にぶい黄褐色粘土。厚さは9～24cmである。上面はI・II区の遺構検出面となっている。

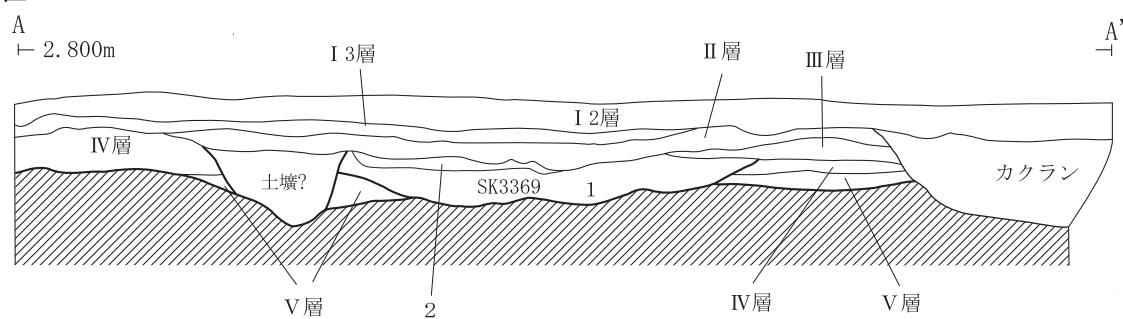
V 層：灰オリーブ粘土。

VI 層：亜泥炭層と砂が互層に堆積している。

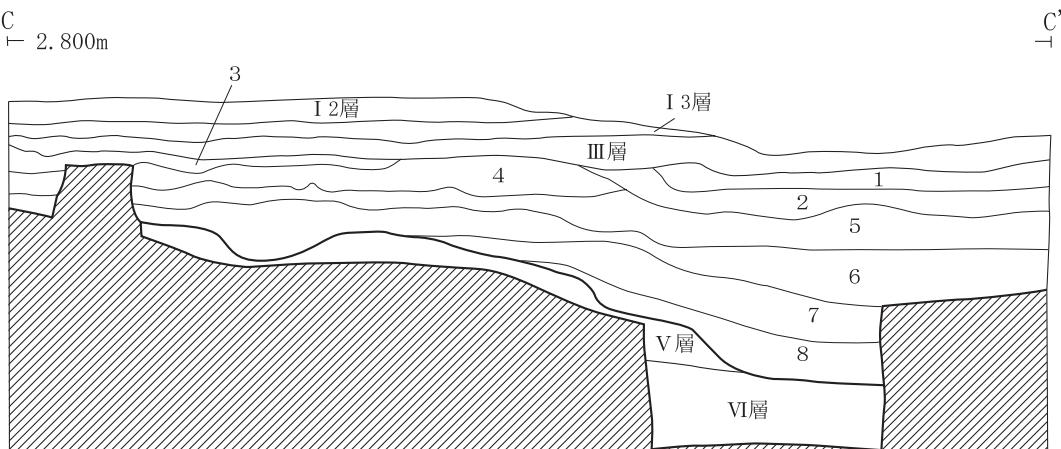
(2) 発見遺構

I区では土壤2基と柱穴1基、II区では溝跡1条発見した。これらは全てIV層上面で検出した。

I区



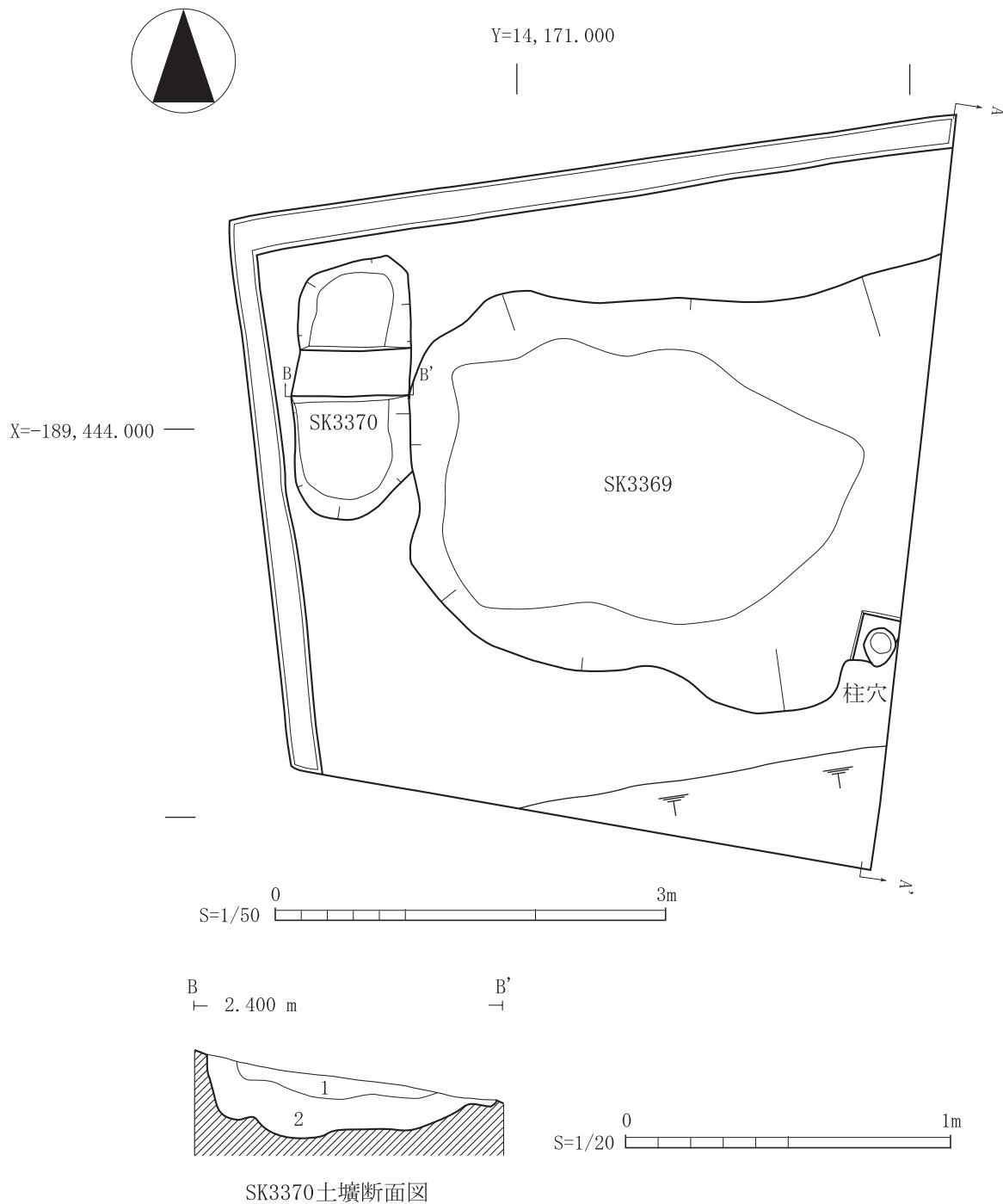
II区



第3図 I・II区東壁断面図

SK3369土壙（第4図）

I区の中央部で発見した大型の土壙である。調査区外東側に延びているが、おおよそ東西に長い楕円形を呈するものと見られる。SK3370及び柱穴と重複し、前者より新しく、後者より古い。規模は長軸3.9m以上、短軸約3.1m、検出面からの深さは26cmで、底面は平坦である。埋土は2層に区分される。1層は砂を主体とした灰褐色土、2層は炭化物、砂、黒色粘土ブロックを含んだ褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

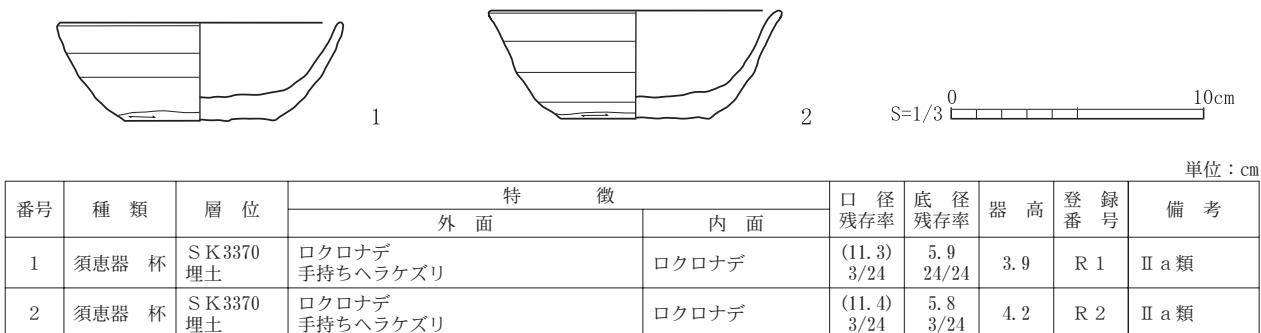


第4図 I区遺構平面図・断面図

S K 3370土壙（第4図）

I区北西隅で発見した土壙である。平面形は南北に長い楕円形である。SK 3371と重複しており、それより古い。規模は長軸約2m、短軸約0.9m、検出面からの深さは20cmである。埋土は2層に区分される。1層は酸化鉄を多く含んだ灰黄褐色土、2層は炭化物を多く含んだ黒褐色粘土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯（IIa類・III類）・蓋・瓶、漆付着土器、丸瓦が出土している。



第5図 SK 3370出土遺物

柱穴（第4図）

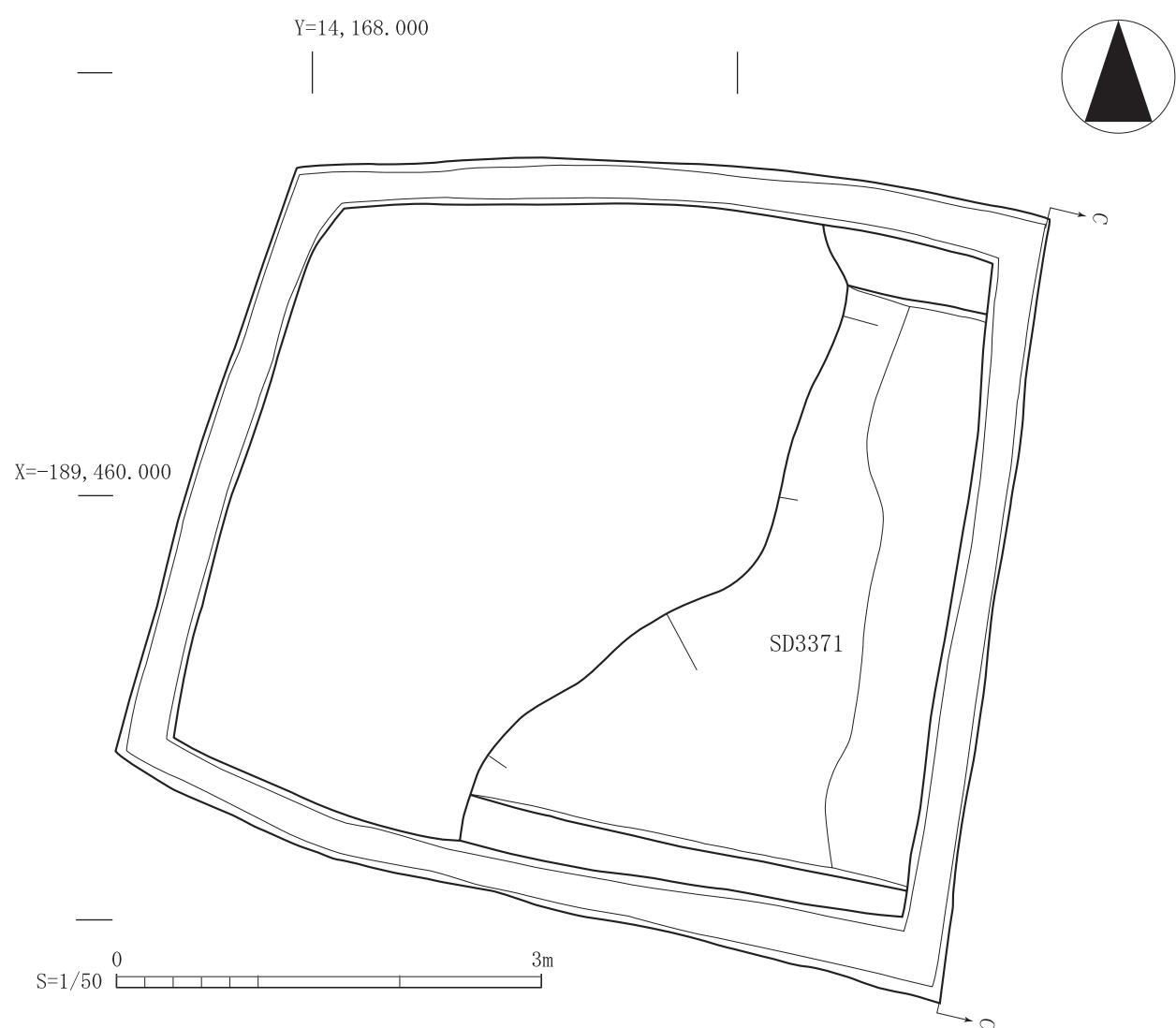
I区南東隅で柱穴1基を発見した。SK 3369と重複しており、それより新しい。平面形は南北に長い円形を呈している。長辺約30cm、短辺約20cm、深さは9cmである。掘り方の埋土はオリーブ黒色土、柱抜取り穴は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

S D 3371溝跡（第6図）

II区東半部で発見した南北方向の溝跡である。大半が調査区外にあるため、確認できた上幅は3.2m、下幅は約0.8m、深さは最も深いところで約1.1mである。底面付近で見ると方向は北で約19度東に偏している。底面からの立ち上がりは緩やかである。埋土は8層に区分され、1層は砂や酸化鉄を含むにぶい黄褐色土、2・3層は砂を含む灰黄褐色土、4層は酸化鉄や炭化物粒子を含む灰色土である。5～8層は黒色土を主体とした粘土で、7・8層の層中には砂や植物遺体を多く含んでいる。遺物は、土師器甕（B類）、須恵器杯（III類）が出土している。

3まとめ

- (1) I区では、土壙2基と柱穴1基を発見した。その内SK 3370の年代については、出土した須恵器杯（IIa類・III類）の技法的特徴から8世紀後葉と考えられる。SK 3371と柱穴からは遺物が出土していないが、両者はいずれもSK 3370と重複し、新しいことが判明していることからそれ以降である。
- (2) II区では、溝跡1条を発見した。年代についてはロクロ調整の土師器甕（B類）や須恵器杯（III類）が出土していることから8世紀後葉と考えられる。
- (3) 当該区周辺は、これまでの調査成果より湿地が広範囲に展開し、遺構の分布が希薄な地区と考えられていたが、今回の調査で古代の遺構が発見されたことにより、その地区の使われ方を考える貴重な成果が得られた。



第6図 II区遺構平面図

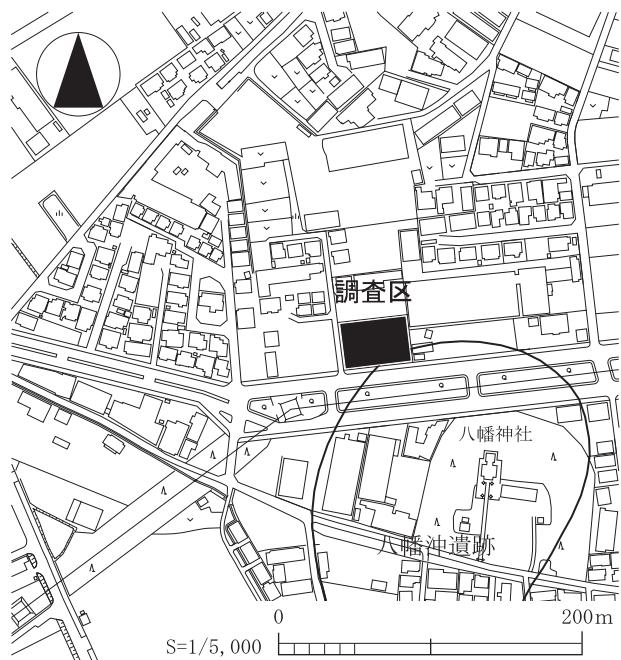


I区調査区全景
(南東より)

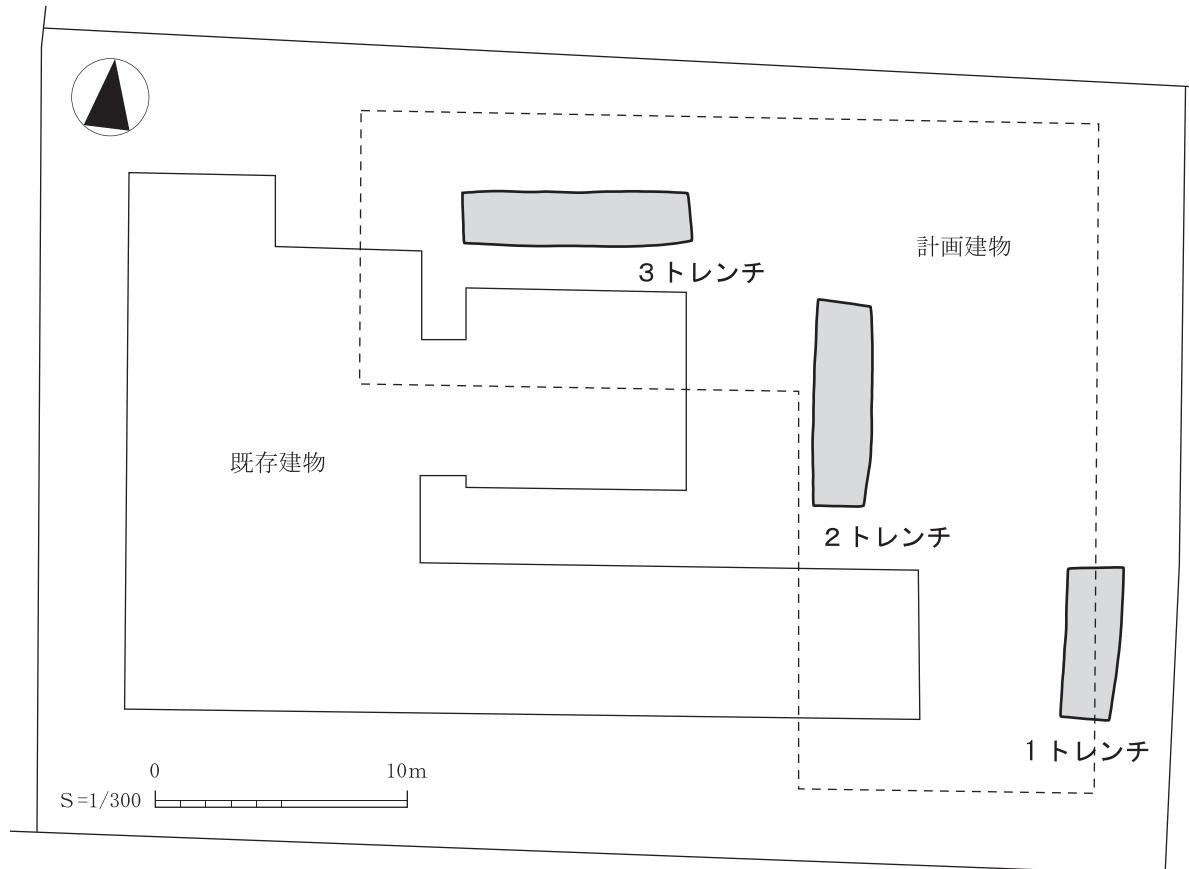
VII 八幡沖遺跡第5次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、社員寮建築計画に伴う確認調査である。平成19年7月に八幡沖遺跡内の社員寮建築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、既存の社員寮を解体し、位置をずらして新たに建て替えるもので、その際の基礎工事において現地表面より1.4mの深さまで掘削を行うというものである。八幡沖遺跡においては、これまで4度にわたる発掘調査を実施しており、平安時代の掘立柱建物跡、溝跡、土壙などの遺構を発見している。しかし、これらの調査はいずれも包蔵地内の南側で実施したものであり、当該地が位置する北側においては、遺構の分布状況は不明であった。そのため、当該地での遺構の



第1図 調査区位置図



第2図 調査地全体図

有無の確認と分布状況の把握を目的とした確認調査が必要であることを申請者に対し回答した。また、当該地の北側は包蔵地から外れるが、この箇所についても確認調査の対象にさせてもらいたい旨を申請者に依頼したこと、承諾及び協力が得られたことから今回の調査の実施に至ったものである。

確認調査は、平成19年8月21日から29日にかけて実施した。調査においては、建物予定地に2×6mと2×10mの調査区（トレンチ）を3箇所設定し、東から順に1～3の番号を付けた。はじめに重機によって表土及び盛土の除去を行い、現地表面から60～90cm下で遺構検出面を確認した。検出作業の結果、1・2トレンチで溝跡、3トレンチで溝跡、土壙等を発見した。これらの遺構は、埋土の掘り下げを行わず平面的な確認にとどめたが、2トレンチの南端部に位置する溝跡の検出面で、須恵系土器1点を発見した。その後、順次遺構検出状況の写真撮影、実測図作成等を行い、最後の埋め戻しをもって調査を終了した。

2 調査成果

（1）発見遺構と遺物

1トレンチ

現地表面から約90cm下の黄褐色砂の上面で溝跡1条を発見した。トレンチの南端に位置し、東西方向に延びるものであるが、幅等は不明である。壁際の断ち割り箇所での観察では、深さ約20cmを測る。なお、上層の搅乱土から製塙土器の破片が1点出土している。

2トレンチ

現地表面から約80cm下の黄褐色砂の上面で溝跡2条とピット1基を発見した。溝跡は、トレンチ中央と南端に位置し、いずれも東西方向に斜行する。前者については、幅40～50cmで、壁際の断面観察では深さが約10cmである。後者については、規模等は不明であるが、検出面から須恵系土器杯の破片が1点出土している。なお、遺構検出面の上層から古墳時代の土師器の破片が1点出土している。

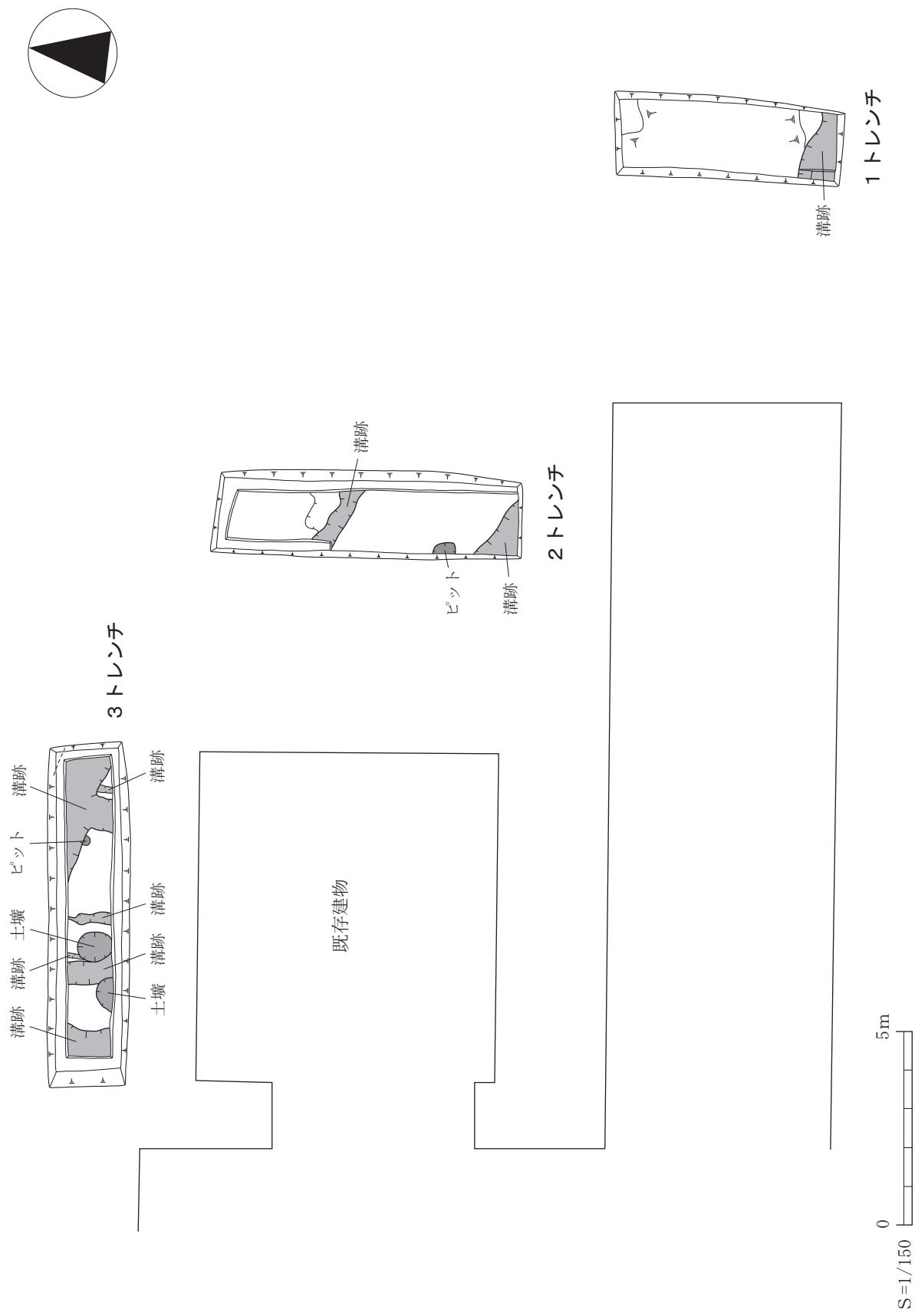
3トレンチ

現地表面から60～70cm下の黄褐色砂の上面で溝跡7条、土壙2基、ピット1基を発見した。トレンチ西半部では、南北方向の溝跡と土壙が重複し、前者が古いことを確認した。西半部の溝跡4条をみると、幅が約15cm、30cm、60cm及び65cm以上と一様ではない。土壙2基は、ほぼ円形を呈し、直径0.8～1.0mと推定される。トレンチ東半部では、東西方向に斜行する溝跡と南北方向の溝跡との接続箇所を検出した。それぞれの幅は、前者が約1.25m、後者が約0.85mである。

3 まとめ

- (1) 建物建築予定地を対象にトレンチを3箇所に設定して確認調査を実施した結果、すべてのトレンチで溝跡や土壙等の遺構を確認した。分布状況をみると、対象地北西部に設定した3トレンチで遺構のまとまりがみられるが、1・2トレンチでは稀薄である。
- (2) 遺構の年代については、埋土の掘り下げを行っていないため詳細は不明である。しかし、2トレンチ検出の溝跡から須恵系土器が出土していることや、これまでに実施した発掘調査においても、須恵系土器が出土する遺構が多いことから、平安時代中頃を中心とする年代が推定される。
- (3) 今回の調査の結果、包蔵地の範囲が北側に広がることが明らかになった。

第3図 遺構配置図





1 トレンチ溝跡断面
(東より)



2 トレンチ溝跡検出状況
(南より)



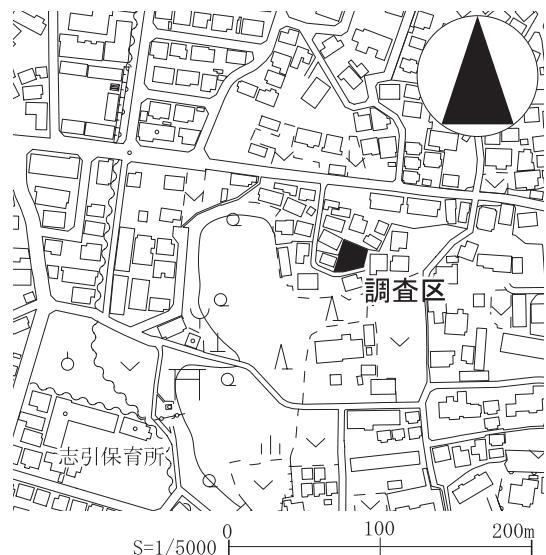
3 トレンチ遺構検出状況
(東より)

写真図版

VIII 志引遺跡第2次調査

1 遺跡の環境と周辺の調査成果

志引遺跡は、多賀城市のおおよそ中央部にある、標高15~19mの丘陵上に立地している。旧国鉄用地であったため、樹木の生い茂る森として、住宅街のなかに取り残されたように存在している。かつては前期旧石器時代と中世の複合遺跡として知られていたが、旧石器は捏造であることが判明し、現在では中世の館跡として登録されている。館跡の遺構は明瞭ではないが、西側で南北方向に延びる土壙状の高まりが確認できる。また、三重の塔を刻み、正和3年（1314）と嘉暦3年（1328）の年紀を記した板碑が立つ土壙状の遺構の存在も知られている。

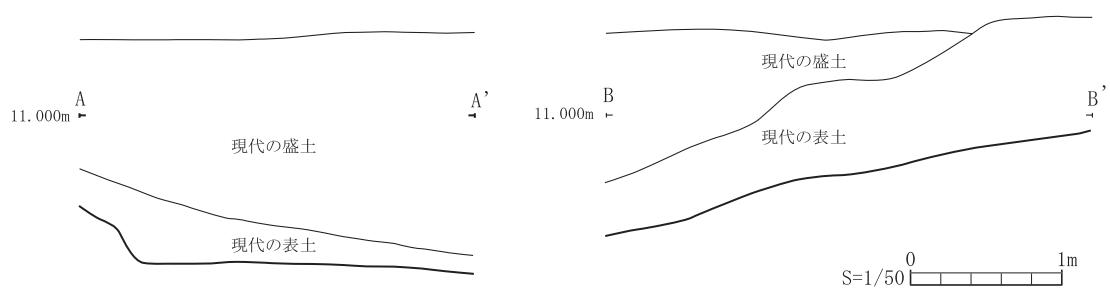
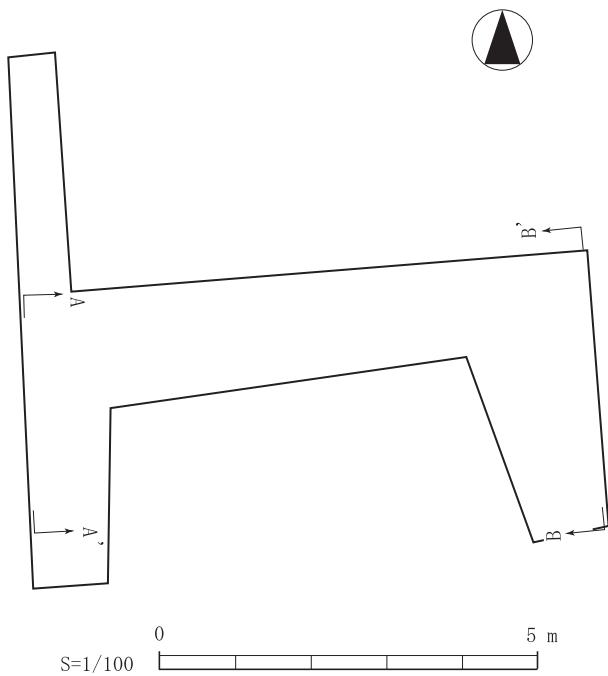


第1図 調査区位置図

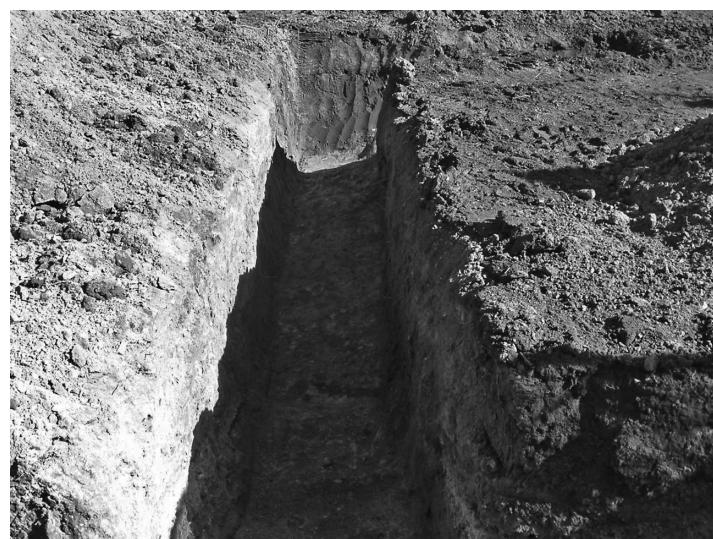
2 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に係る確認調査である。平成19年11月、地権者より当該区における住宅建設と埋蔵文化財とのかかわりについて協議書が提出された。計画では、基礎工事の際直径200mm、長さ3.5mのR C杭を45本打ち込むことから埋蔵文化財への影響が懸念されたが、本遺跡においては捏造事件に関わるもの以外に発掘調査の実績がなく、遺構の分布状況等については全く手がかりがなかった。そのため、確認調査を実施する方向で協議を進め、平成20年2月7日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、2月14日に確認調査を実施した。

今回の調査区は本遺跡の北端部に近く、丘陵北斜面の裾部にあたる。すでに宅地として造成されており、厚く盛土が施されていることから、調査にあたっては地権者側から重機の提供を受け、調査対象区の西半部において表土の除去を行った。表土は、造成による盛土が最大で約1.5m、それ以前の表土が15~75cmの厚さで堆積しており、その下は地山となっている。地山は南側から北側に向かって低くなっている。遺構は発見できなかった。遺物は造成前の表土から土師器と須恵器の小片が数点出土した。



第2図 平面図及び断面図

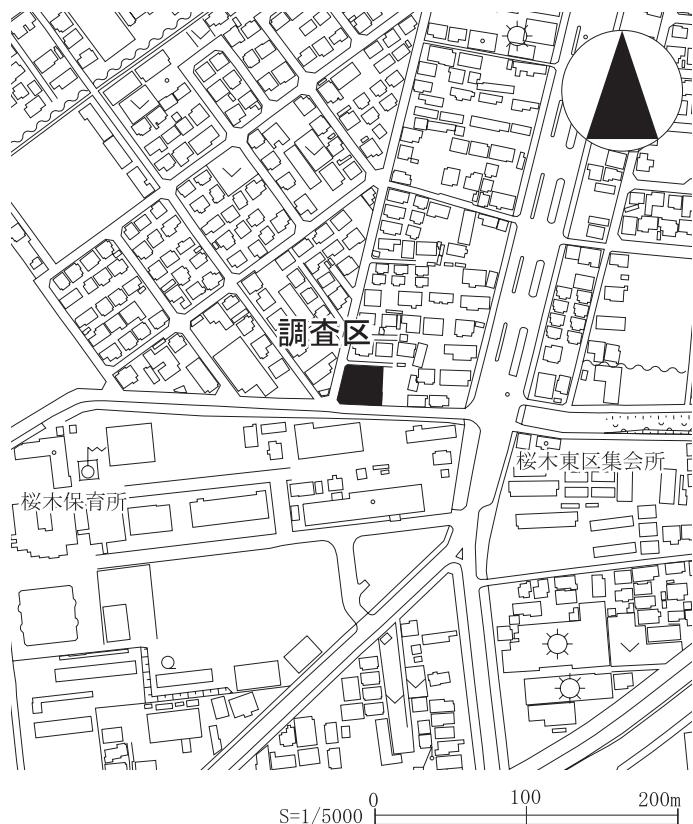


調査区（南より）

IX 桜木遺跡第1次調査

1 遺跡の環境と周辺の調査成果

桜木遺跡は、多賀城市の東半部、工場地帯に面した住宅地の中に所在する遺跡である。周辺一帯は地形的に低湿地に分類され、現状でも標高2m未満と市内でも地盤の低い地域として知られている。本遺跡が埋蔵文化財包蔵地として知られるようになったのは昭和54年のことであり、同年8月に実施した分布調査において、宅地の一角に土壘状の高まりを発見したことによる。その時の「遺跡カード」によれば、南北方向にのびる幅4m、高さ1.3mの高まりが18.2mにわたって確認され、その両端は道路と住宅になっているため、延長部については不明とされている。本遺跡については遺物も採集されておらず、詳細は不明であるものの、土壘状の高まりの存在から中世の館跡と考えられ、東西・南北とも約70mをその範囲として今日に至っている。



第1図 調査区位置図

2 調査に至る経緯と経過

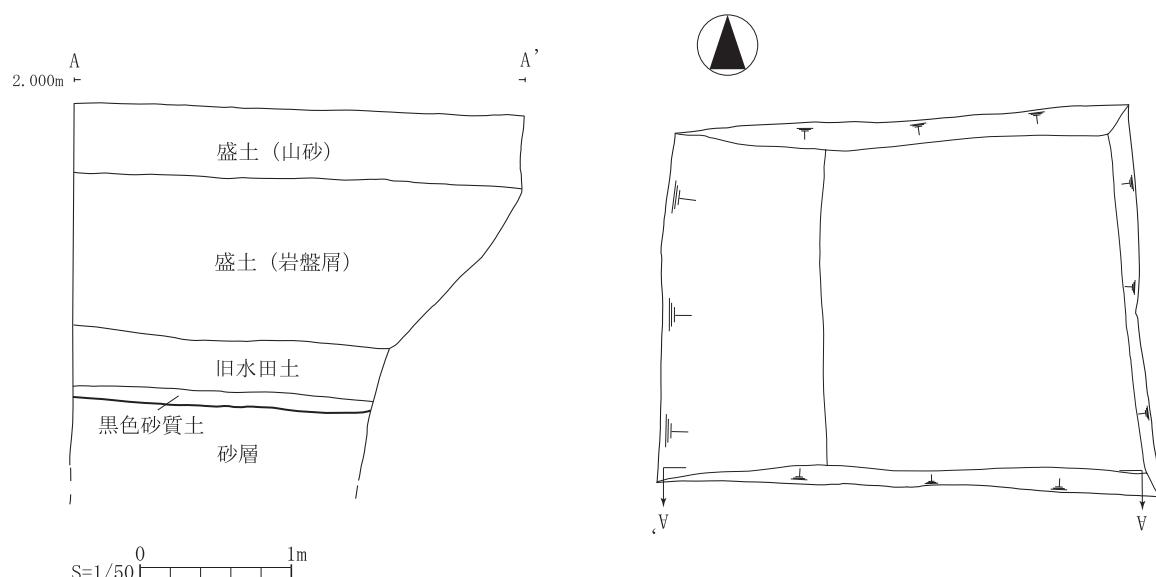
本調査は、個人住宅建設に係る確認調査である。平成19年12月、地権者より当該区における住宅建設と埋蔵文化財とのかかわりについて協議書が提出された。計画では、基礎工事の際直径139.8mm、長さ4mの鋼管杭を49本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響は懸念されたが、本遺跡においてはこれまでに発掘調査を行ったことがなく、遺構の分布状況等について全く手がかりがなかったことから確認調査を実施する方向で協議を進め、平成19年12月13日に地権者から調査に関する依頼書の提出を受け、平成20年2月19日に確認調査を実施した。対象地区のやや西よりに東西・南北とも約2.2mの調査区を設定し、重機を使用して表土を除去した。表土は、現代



土壘状の高まり（昭和54年撮影）

の盛土が約1.6m、旧水田耕作土が35~40cmの厚さであり、その下には約10cmの厚さで黒色砂質土の堆積が見られた。その下は軟弱な砂層となっており、遺構・遺物とも発見できなかった。黒色砂質土や砂層は東側から西側に向かって緩やかに低く傾斜しており、砂層上面の標高は0.17~0.27mである。これらのことから遺構が存在する可能性は極めて低いと考えられ、これ以上の調査は不要と判断して調査を終了した。

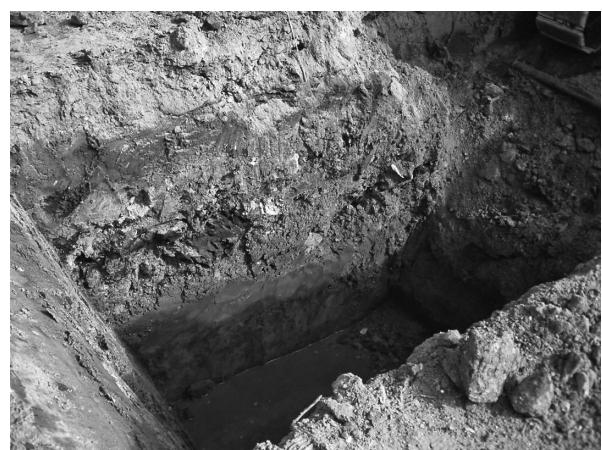
今回の調査結果により、当初土壘と考えられた高まりは現代の盛土の上に積まれたものであることが明らかとなり、「桜木遺跡」を埋蔵文化財包蔵地とすることに疑問を提示する結果となった。



第2図 平面図及び断面図



調査風景



調査区土層堆積状況（北より）

X 山王遺跡第67次調査

1 調査に至る経緯と経過

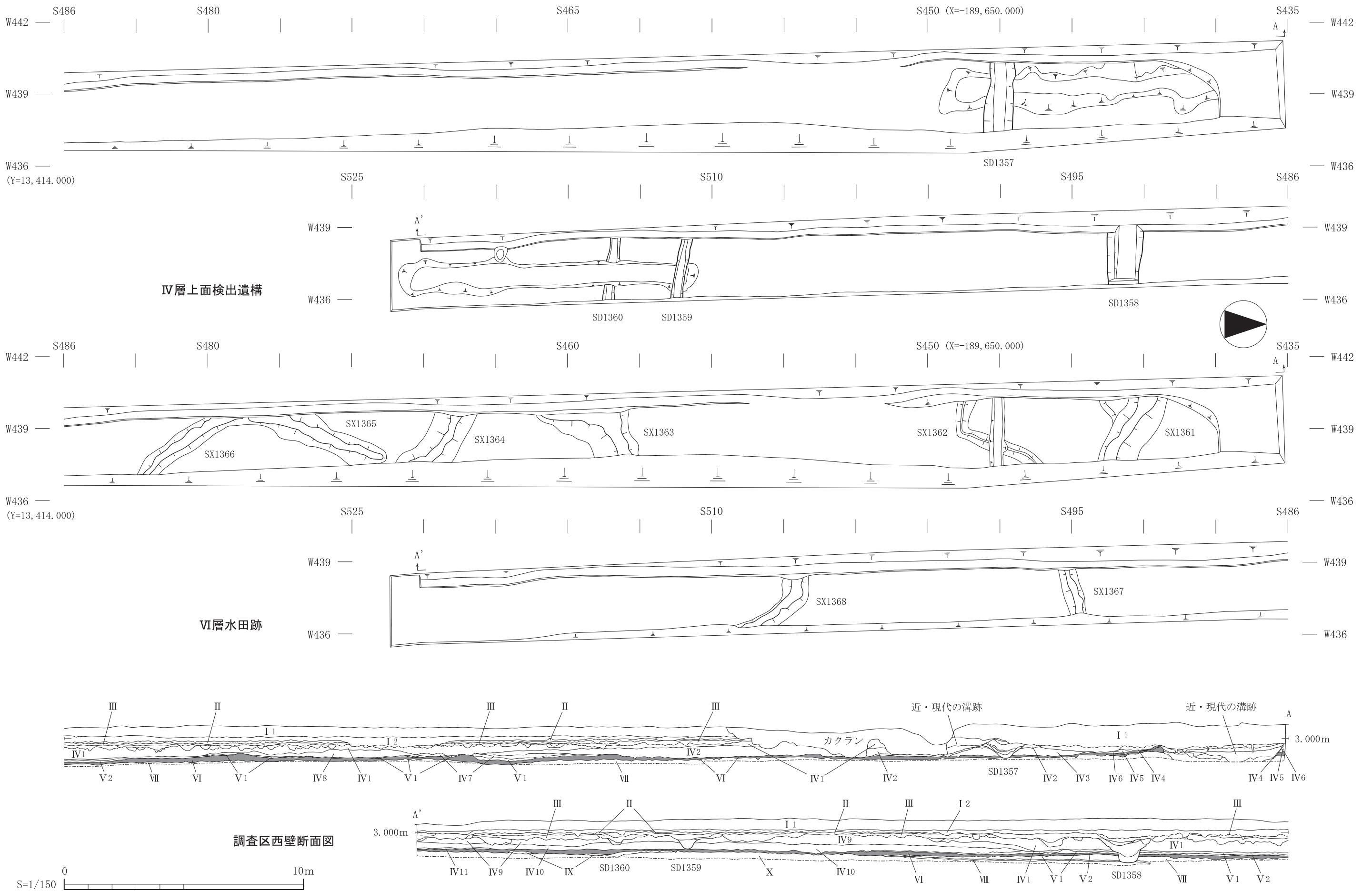
本調査は、平成20年度の加瀬用排水路3号整備工事事業に伴うものである。この事業は、山王遺跡の東半部中央付近を南北方向に縦断する既存水路の改修・整備工事であり、埋蔵文化財への影響が懸念されるものの、周辺の農業基盤を整備するために必要不可欠なものであることから、平成16年度から継続して発掘調査を実施し対処してきている。今年度については、平成20年10月に多賀城市市民経済部農政課より、当該地における農業用排水路整備計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、既存水路の位置に新たにコンクリートU型フリュームを延長78mにわたって設置するが、その際の掘削幅は約4m、深さは約1.6mというものであった。なお、この事業は北側から順に工区分けし工事を実施してきているが、今年度の対象地は山王遺跡の南端部にある。

山王遺跡は、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であり、弥生時代中期頃の水田跡、古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、大溝によって区画された中世の屋敷跡等が発見されている。本事業に伴う発掘調査では、平成16・17・18年度（第46・59・60次調査）の調査において、古代の方格地割に関する道路跡や溝跡等が検出されている。また、第59・60次調査では古墳時代の水田跡が検出されている。昨年度に実施した第64次調査においては、古代の遺構は稀薄であったものの、古墳時代の水田耕作土と畦畔が調査区全域にわたって検出されている。

調査は、12月5日から開始した。はじめに重機により表土と既存水路内に堆積した土砂の除去を行い、併せて護岸用の杭と板材を撤去した。続いて遺構検出作業を行い、10日までに東西方向に延びる溝跡4条を検出し、埋土の掘り下げを行った。このうちの3条の埋土中に10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰が含まれることを確認した。11日には、実測図作成のための測量基準点を設定した。なお、測量基準線については、これまでの調査と同様にX=-189,200.000、Y=13,850.000（古代の方格地割内南北・東西大路交差点の中央付近）を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに東西方向はE1、E2…、W1、W2…、南北方向はN1、N2…、S1、S2…と表示している。調査は、調査区西壁における断面観察の結果、昨年度北側で実施した第64次調査で検出した古墳時代の水田耕作土層が本調査区にも延びてきていることを確認したことから、この土層面までの掘り下げを重機によって行った。この作業は18日に行い、



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図・断面図

併せて水田に伴う8条の畦畔を検出した。その後、これらの遺構の平面図作成及び調査区全体の断面図作成を行った。20日にプラント・オパール分析のための土壤サンプルを採取し、25日に器材を撤収してすべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した基本的な層序は、以下のとおりである。

I層：2層に分けられる。上層は、現代の水田耕作土及び畦畔積土で、厚さは30～90cmである。下層は現代の水田耕作土で、厚さは10～30cmである。

II層：黒褐色土で、厚さは5～12cmである。断続的ではあるが、調査区のほぼ全域に水平に堆積する。同色の砂質土を若干含んでいる。

III層：黄灰色土で、厚さは5～20cmである。断続的ではあるが、調査区のほぼ全域に水平に堆積する。灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。

IV層：にぶい黄色～灰オリーブ色の砂である。土色、砂の粒子の大きさ、堆積の傾斜等の違いで11層に分けられる。それぞれの厚さは5～45cmであるが、全体的には40～70cmで調査区全域に厚く堆積している。上面は古代の遺構検出面である。

V層：2層に分けられる。上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粘質土である。それぞれの厚さは4～10cmと薄い。調査区中央付近に堆積する。いずれも植物遺存体を含んでいるが、上層の方が顕著である。上層はオリーブ灰色砂、下層はオリーブ灰色粘質土と互層に堆積している。

VI層：黒色粘質土で、厚さは8～25cmである。調査区の全域にほぼ水平に堆積する。北側から続く古墳時代の水田耕作土である。

VII層：オリーブ灰色砂で、厚さは25cm以上である。調査区南側を除いたほぼ全域に堆積する。

VIII層：黒色粘土で、厚さは2～7cmと薄い。調査区南半部で確認でき、北側に向かって緩やかに傾斜する。

IX層：灰色粘質土で、厚さは8～15cmである。調査区南側で断続的に堆積する。

X層：オリーブ灰色砂で、厚さは25cm以上である。調査区南半部での確認であり、北半部での状況は不明である。

(2) 発見遺構と遺物

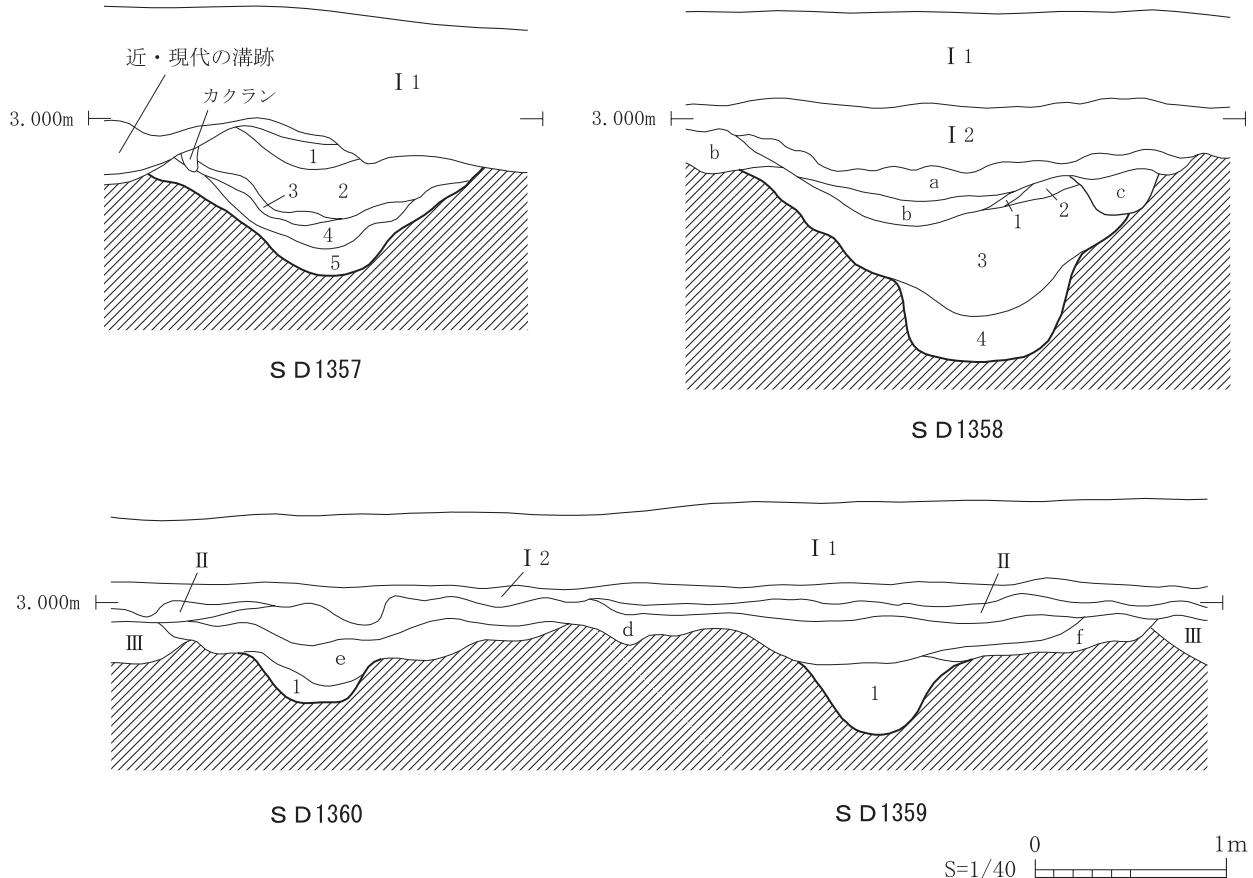
S D 1357溝跡（第2・3図）

調査区北側のIV層上面で検出した東西方向の溝跡である。方向は、発掘基準線にほぼ一致する。規模は、上幅1.1～1.2m、下幅0.4～0.5m、深さは調査区西壁でみると約0.7mである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は5層に分けられる。1～3層は黄灰色土を主体とする土層で、3層は灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含んでいる。4層は黒褐色粘質土、5層はにぶい黄色砂質土である。遺物は出土していない。

S D 1358溝跡（第2・3図）

調査区中央付近のIV層上面で検出した東西方向の溝跡である。方向は、発掘基準線にほぼ一致する。規模は、上幅1.3～1.5m、下幅0.7～0.8m、深さは調査区西壁でみると約0.9mである。底面は平坦に近く、

壁は比較的急に立ち上がる。南壁では中位に段を有する。埋土は4層に分けられる。1・2層は黄灰色土で、1層は灰白色火山灰を斑状及び小ブロック状に多く含んでいる。3層は黒褐色粘質土、4層はオリーブ灰色粘質土である。遺物は、土師器甕が出土している。



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD 1357埋土			SD 1359埋土		
1	黄灰色土	同色の砂と黒褐色土を混入。	1	黒褐色土	灰白色火山灰を斑状及びブロック状に若干含む。
2	黄灰色土	同色の砂を混入。	SD 1360埋土		
3	黄灰色土	灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含む。	1	黒褐色土	やや砂質。
4	黒褐色粘質土 にぶい黄色砂質土	にぶい黄色砂を若干混入。	堆積土等		
5	黒褐色粘質土 にぶい黄色砂質土	黒褐色粘質土を斑状及びブロック状に含む。	a	黄灰色粘質土	
SD 1358埋土			b	黒粘質土	
1	黄灰色土	灰白色火山灰を斑状及び小ブロック状に多く含む。	c	黄灰色土	にぶい黄色砂質土を斑状に若干含む。遺構埋土か。
2	黄灰色土	にぶい黄色砂質土と斑状に若干含む。	d	暗灰色砂質土	粒子の粗い砂を混入。
3	黒褐色粘質土	上部でにぶい黄色砂質土を斑状及び小ブロック状に若干含む。	e	黄砂質土	
4	オリーブ灰色粘質土	黒褐色粘質土を斑状及びブロック状に含む。	f	黄砂質灰土	

第3図 溝跡断面図（調査区西壁）

S D 1359溝跡（第2・3図）

調査区南側のIV層上面で検出した東西方向の溝跡である。方向は、東で約8度南に偏している。規模は、上幅45～50cm、下幅15～30cm、深さは調査区西壁でみると約40cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土で、灰白色火山灰を斑状及びブロック状にわずかに含んでいる。遺物は出土していない。

S D 1360溝跡（第2・3図）

調査区南側のIV層上面で検出した東西方向の溝跡である。方向は、東で約6度南に偏している。規模は、上幅40～50cm、下幅20～30cm、深さは調査区西壁でみると約25cmである。底面は平坦に近く、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色土である。遺物は、土師器甕が出土している。

VI層水田跡（第2図）

調査区全域で、水田耕作土（VI層）と畦畔を検出した。なお、本調査におけるVI層は、第64次調査でVII層とした古墳時代の水田耕作土と同じ土層である。黒色粘質土で、本調査区内での厚さは8～25cmである。畦畔は、北からS X 1361～1368の8本を検出した。いずれも耕作土を盛り上げて形作っている。幅は、S X 1362・1365～1368の5本が60～125cmで、70～80cmにおさまるものが多い。一方、S X 1361・1363・1364の3本は150～185cmと規模がやや大きい。高さは、調査区西壁でみるとS X 1361・1363～1366は20～30cmであるが、S X 1362・1367・1368は10～12cmであり、特に南側の2本は平面でみても高まりが明瞭ではない。方向をみると、S X 1362とS X 1365が北で東への傾きが約20度、S X 1366とS X 1368が北で西への傾きがそれぞれ約35度と約37度、S X 1363とS X 1367が東で北への傾きがそれぞれ約22度と約14度、S X 1361とS X 1364が東で南への傾きがそれぞれ約35度と約28度で、近似した数値を示すものが複数存在する。また、これらの畦畔によって9区画の水田跡が形成されるが、各水田面の標高は、北から2.4m、2.3m、2.2m、2.2m、2.2m、2.2m、2.0～2.1m、2.1～2.2m、2.3mで、調査区中央付近がやや低くなっている。なお、区画の異なる6箇所から採取した土壤で、VI層のプラント・オパール分析を行った結果、すべての地点でプラント・オパールが検出された（別稿参照）。特に南半部で高い密度であった。

3 まとめ

- (1) 山王遺跡の南端部において調査を行い、古代の溝跡と古墳時代の水田跡を発見した。
- (2) 古代の溝跡は、4条発見した。すべて東西方向に延びるものである。埋土中に灰白色火山灰を含むものが多いことから、10世紀前葉を中心とした時期が考えられる。
- (3) 今回、古墳時代の水田跡を発見したことによって、これまで北側において行った調査で確認されていた水田跡の範囲が、さらに南側にも広がることが明らかになった。

附章 山王遺跡第67次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

山王遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。平成19年度に実施された第64次調査では、古墳時代の水田跡が検出され、同層で行われたプラント・オパール分析でも、水田を裏付ける結果が得られた。第67次調査区はその南側に位置しており、第64次調査で確認された古墳時代の水田耕作層と同じ土層において、畦畔状の高まりによって区分けされた区画が広い範囲で検出された。なお、調査区の中央部では当該層の直上にスクモ層といわれる植物遺存体を多く含む土層が堆積しているのに対し、北側と南側では河川堆積層と考えられる砂層が堆積する。また、南半部で検出された畦畔状の高まりは、北半部ほど明瞭ではなかった。そこで、当該層における稻作の様相を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施することになった。

2. 試料

調査対象となった層準は、古墳時代とされる畠畦状の高まりで区切られた区画が検出された土層である。分析試料は、それぞれ異なる区画において北側よりNo. 1 地点～No. 6 地点の6箇所より採取された。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}g$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節型は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラン

ト・オパールのほかに海綿骨針も確認された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネはすべての地点で検出されている。No.5 地点とNo.6 地点では高い密度である。キビ族型はNo.5 地点とNo.6 地点で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、およびチマキザサ節型はすべての地点で検出されている。ヨシ属がNo.1 地点、No.2 地点、No.4 地点およびNo.5 地点で高い密度である以外は、いずれの分類群も低い密度である。ミヤコザサ節型はNo.2 地点、No.4 地点、No.6 地点で検出されているが、いずれも低い密度である。なお、No.4 地点、No.5 地点、No.6 地点からは海綿骨針が検出されている。

5. 考察

古墳時代とされる畠畔状区画6箇所において分析を行った結果、すべての試料でイネのプラント・オパールが検出された。このうち南側のNo.5 地点とNo.6 地点では、密度がそれぞれ6,000個/g、5,400個/gであり、稻作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/g以上の条件を満たしている。また、No.4 地点でも2,400個/gと比較的高い密度である。したがって、これら各区画において稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。一方、北側のNo.1 地点とNo.2 地点、中央部のNo.3 地点では密度が1,200～1,800個/gとやや低い値である。ただし、これらの地点で検出された畠畔状の高まりは、南側のものよりも明瞭であった。こうしたことから、北半部においても稻作が行われていた可能性が考えられる。

今回の調査では、畠畔状の区画が検出された層準において複数の区画で分析を行ったところ、地点によってイネのプラント・オパール密度に違いが認められた。上述のとおりいずれも水田跡と判断されることから、密度の相違はそれぞれの区画での耕作期間（年数）の違いに起因していると考えられる。いくら水田が連作可能であると言っても、化学肥料の無い時代にある程度の年数稻作を継続すれば、土地は次第に痩せていき生産性は劣ってしまう。そのため、一旦耕作を休止し地力の回復を図る必要がある。本遺跡でもこうした休耕が行われたことにより、区画によって耕作の行われた年数が異なった可能性が示唆される。

なお山王遺跡では、これまでに実施された第59次調査、第60次調査および第64次調査においても、分析地点によって検出密度に幅が認められているが、これらについても同様のことが想定される。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が各地点で高い密度で検出されている。推定生産量（図の右側）をみると、いずれもヨシ属が優勢な状況であることがわかる。このことから、当該層の堆積時の調査地は湿った環境であり、近辺にヨシ属が繁茂していたか、調査区の中央部では直上にスクモ層の堆積が認められるため、水田廃絶後にヨシ属が繁茂した可能性が考えられる。なお、今回の分析では下位層の状況がわからなかったため、湿地を開いて水田が造成された可能性については言及できない。

6. まとめ

山王遺跡第67次調査において検出された畠畔状の高まりで区分けされた区画において、プラント・オパール分析を行い稻作の可能性について検討した。その結果、各区画よりイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらが水田であった可能性が高いと判断された。また、調査地は近辺は湿地の環境であったことが推定された。

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)	層位	調査区西壁					
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	18	12	12	24	60	54
キビ族型	<i>Paniceae</i> type					12	6
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	42	30	12	66	36	24
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	18	18	18	18	18	30
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6	24	12	18	24	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6	24	12	18	24	18
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	12	12	6	12	18	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		6		6		6
その他	Others	6	6	6	12	12	12
未分類等	Unknown	132	161	132	143	192	182
(海綿骨針)	Sponge				6	6	6
プラント・オパール総数	Total	240	293	210	317	396	362

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.53	0.35	0.35	0.70	1.76	1.60
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.65	1.89	0.75	4.15	2.27	1.53
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.38
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.28	0.14	0.21	0.28	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.11	0.06	0.09	0.11	0.09
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.09	0.09	0.04	0.09	0.13	0.09
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.02		0.02		0.02

表1 山王遺跡第67次調査のプラント・オパール分析結果

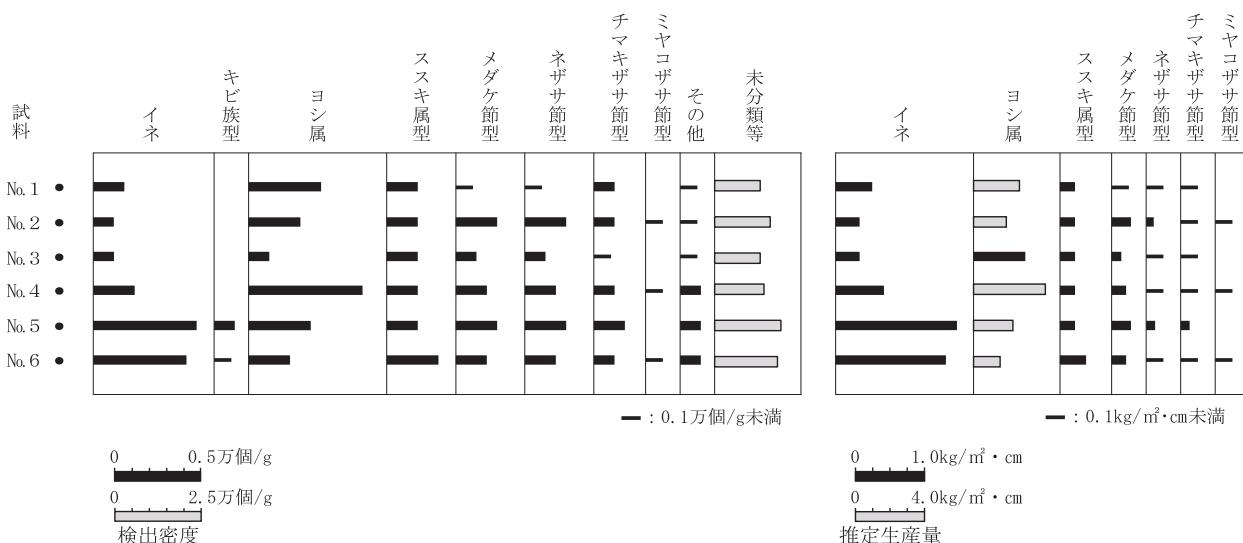
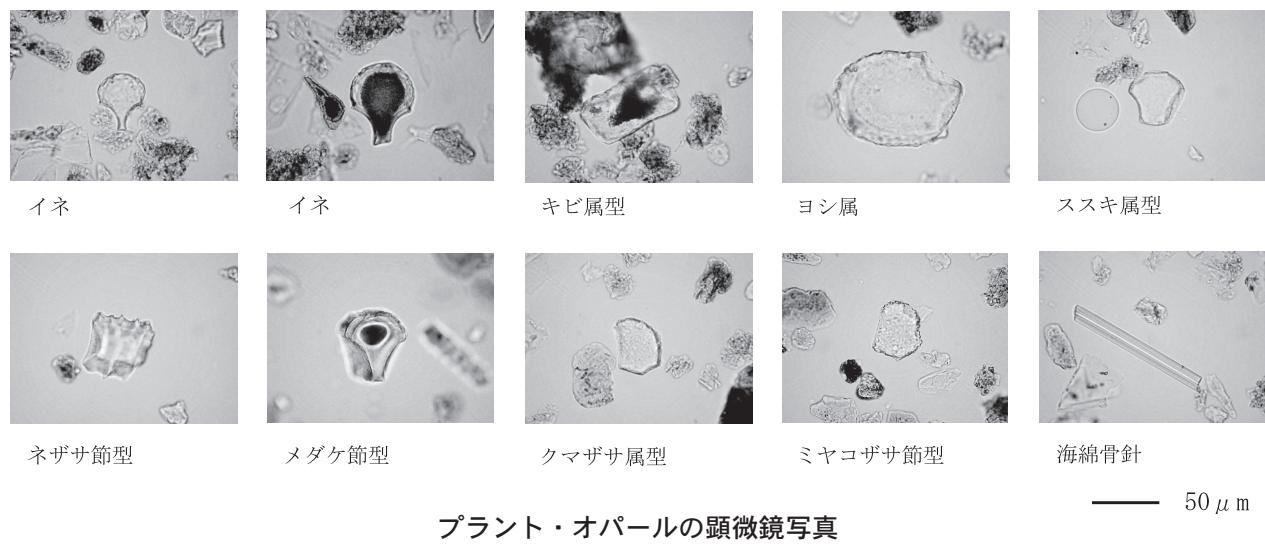


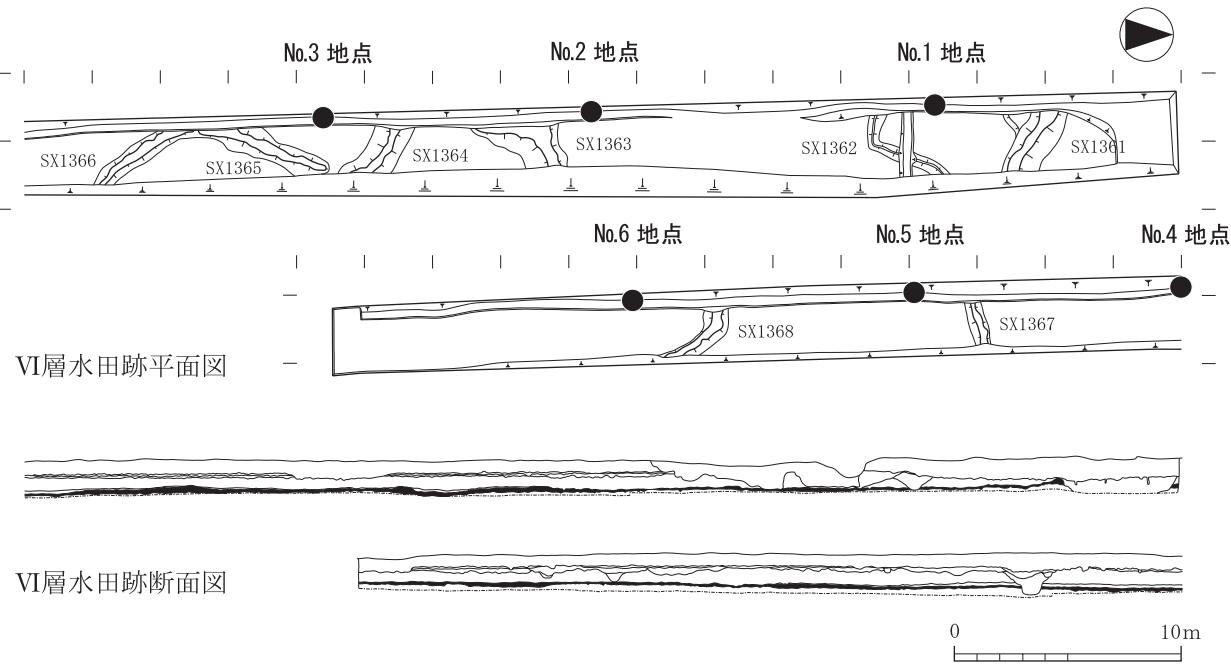
図1 山王遺跡第67次調査のプラント・オパール分析結果



プラント・オパールの顕微鏡写真

文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 31, p. 70-83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－. 考古学と自然科学, 20, p. 81-92.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
 藤原宏志 (1998) 稲作の起源を探る. 岩波新書.



付図 土壤分析試料採取地点



IV層上面検出状況（南より）



IV層水田跡検出状況（南より）

写真図版 1



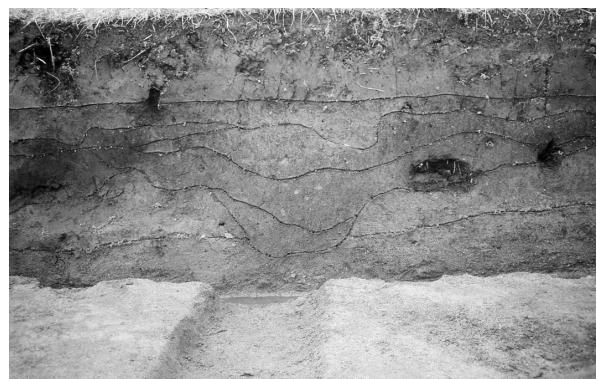
S D 1357溝跡（東より）



S D 1358溝跡（東より）



S D 1359溝跡（東より）



S D 1360溝跡（東より）



S X 1361断面（東より）



S X 1363（北東より）



S X 1364（南東より）



S X 1365（南西より）

写真図版2

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき1						
書名	多賀城市内の遺跡1						
副書名	平成19年度発掘調査報告書ほか						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第96集						
編著者名	千葉孝弥、石川俊英、島田 敬、武田健市						
編集機関	多賀城市教育委員会						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 TEL022-368-0134						
発行年月日	西暦2009年3月31日						

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎古墳群 (第4次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目228-5	042099	18002	38度 17分 40秒	140度 59分 46秒	20070329 20070406	10m ²	擁壁設置工事
高崎遺跡 (第65次)	宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目21	042099	18018	38度 17分 58秒	141度 0分 18秒	20070622 20070705	11m ²	道路改良工事
高崎遺跡 (第67次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目164-1	042099	18018	38度 17分 42秒	140度 59分 58秒	20070719 20070803	150m ²	農地改良
市川橋遺跡 (第63次)	宮城県多賀城市 城南一丁目1-12	042099	18008	38度 17分 50秒	140度 59分 25秒	20070627 20070709	37m ²	個人住宅建設
市川橋遺跡 (第68次)	宮城県多賀城市 城南二丁目15-8外	042099	18008	38度 17分 34秒	140度 59分 42秒	20071218 20080111	60m ²	個人住宅建設
八幡沖遺跡 (第5次)	宮城県多賀城市 明月一丁目29-1外	042099	18007	38度 16分 50秒	141度 0分 28秒	20070821 20070829	48m ²	社員寮建設
志引遺跡 (第2次)	宮城県多賀城市 東田中二丁目124-10外	042099	18020	38度 17分 21秒	140度 0分 4秒	20080214	19m ²	個人住宅建設
桜木遺跡 (第1次)	宮城県多賀城市 桜木二丁目9-33	042099	18041	38度 17分 10秒	141度 0分 50秒	20080219	5m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第67次)	宮城県多賀城市 山王四区、山王五区 市川字多賀前	042099	18013	38度 17分 28秒	140度 59分 11秒	20081205 20081225	220m ²	農業用排水路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
たかさき こ ふんぐん 高崎古墳群 (第4次)	高塚古墳 集 落	奈良 平安	整地地形・ 溝状遺構	土師器・須恵器・ 瓦・灰釉陶器		
たかさき 高崎遺跡 (第65次)	集落・城館	奈良 平安	竪穴住居・掘 立柱建物・溝 ・平場状遺構	土師器・須恵器		
たかさき 高崎遺跡 (第67次)	集落・城館	古代	竪穴住居・溝	須恵器・瓦		
いちかわばし 市川橋遺跡 (第63次)	集落・都市	古代	河川			
いちかわばし 市川橋遺跡 (第68次)	集落・都市	古代	溝・土壙	土師器・須恵器・ 瓦		
や わたおき 八幡沖遺跡 (第5次)	集落	古代	溝・土壙	須恵系土器		
しひき 志引遺跡 (第2次)	散布地 ・城館	古代 中世		土師器・須恵器		
さくらぎ 桜木遺跡 (第1次)	城館か	不明				
さんのう 山王遺跡 (第67次)	集落・都市	古墳	水田			
		古代	溝	土師器		
要 約						
高崎古墳群第4次調査では、「東西大路東道路」の東側延長線上で古代の整地地形を発見した。						
高崎遺跡第65次調査では、8世紀後葉頃の竪穴住居跡やそれより古い掘立柱建物跡、溝跡を発見した。						
高崎遺跡第67次調査では、古代の竪穴住居跡、溝跡を発見した。竪穴住居跡は、カマド煙道部の壁の補強に転用した瓦を用いている。						
市川橋遺跡第63次調査では、古代の河川跡を発見した。						
市川橋遺跡第68次調査では、湿地部との境付近で古代の溝跡、土壙等を発見した。						
八幡沖遺跡第5次調査では、3箇所に設定したトレンチにおいて、平安時代中頃を中心とした時期の溝跡や土壙等を確認した。この結果、遺跡の範囲が北側に広がることが明らかになった。						
志引遺跡第2次調査では、遺構は発見できなかった。						
桜木遺跡第1次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。						
山王遺跡第67次調査では、古代の溝跡と古墳時代の水田跡を発見した。後者については、今回の発見で水田跡の範囲がこれまでよりさらに南側に広がることが明らかになった。						

多賀城市文化財調査報告書第96集

多賀城市内の遺跡 1

－平成19年度発掘調査報告書ほか－

平成21年3月31日発行

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022)368-1141

印刷 有限会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話 (022)365-1151
